

さて吉次の出て居るお座敷へ行く、見ると二三の客と、女將と、吉次とお花合を引いて居る。

「濟みませんが、吉ちゃんに一寸」

と其傍に坐つて、耳のそばで譯を話す。

「一所に行て頂戴な、お前さんは強いからね」

「だつて、今私は困るけれど、ア、さうお前さんも困るわねエ」

「關はないわ、一寸行て御馳走になつて、直ぐ歸るのだからさ」

甚だ無茶だが、兩妓の間には、之が無茶でないのだから可笑しい。

「さうね、私は常陸關を善く知て居るしね、一寸行て來やうかね」

平然として、吉次が立ち掛けると、相手のお客が

「まあ〜待て下さい、戲譚じやありませんぜ、人が呼んでる藝妓を、挨拶もなしに浚つて

行かうとする、浚はれる藝妓も藝妓だが、——一體何所の何と云ふお方です」

此のお客、何も彼も知り抜いて居て斯様事を云ふ、成程さうだとお鯉も吉次も笑ひ出して。

「私の用なんですから、一寸貸して下さい」

と頼む、相手は益々面白がつて

「私の色女を、一人連れて行かれては困りますが、強てと仰やるなら、私も一所にお連れ下

さす」

と、洒落れたお客である。

「貴方、随分粹なお客ね、そんなら是非御一所に行て下さいね」

「行きまじやう」

戲談から、駒が出て、連れて行かう、行かれやうと云ふ事になつた、お鯉は此時不圖一策を

思ひ就いた。

「吉ちゃん、此の粹なお客を私の情人と云ふ事にして、この人が嫉妬家で、私に附て來たと

云て頂戴な」

お客は益々面白がつて。

「宜しい、色男でも間夫でも結構」

然し此人は、まだ其行く先が常陸山の座敷とは知らないのである。

(八八) 乾坤一擲の大勝負

——見玉大將の神機妙算奇略

常陸山がお鯉の来るのを待つて居る、待合立川の玄關へ、お鯉と、吉次と、粹な人と三人で乗り込む、吉次は先づ二人を待たせて。

「奥でお待ちかね」

と取り次ぐ女中に案内されて、常陸の座敷へ行く。

「關取、お鯉さんを連れて来ましたよ、處が今日は嫉妬家の、お客が一緒に居て、何でも伴いて行くと云て聞かないんです、で、一緒に来たんですが、此處へ連れて来ててもよくつて」豈敢に、悪いとも云ひ兼ねる常陸山、好いから連れて来いと云ふ。

玄關では件の粹なお客、髯面を撫で廻しながら

「斯う云ふ事なら、白粉でも付けて来るんだつた、間に合はないで残念」

などと戯言けて居る、吉次が迎ひに来て、三人どや／＼と常陸の座敷に雪崩れ込む。

見ると、床の間の正面には新横綱の常陸山が山の如く大安坐を搔いて、納まつて居るではないか、粹なお客も有繋に吃驚した、可笑しくもあり氣の毒でもある。

之が普通の座敷であればだが、相手は力士である、藝人である、祝儀でも出して勘辨して貰はうか、と頻りに氣を揉むのを強て止めて、立川への茶代を出して貰つて、其處は淡泊り常陸山の御馳走になつて

「では再來ますわ」

極く軽い調子で退却した。

其後お鯉が田川へ行つて、此時の話をした、女將も呆れて

「誘ふ藝妓も藝妓だが、附いて行くお客もお客だよ、丁度好い對手かも知れない」

と笑つた、全く一つ話である。

* * * * *

かたや常陸山、こなた荒岩、兩雄の雌雄を決すべき日が來た、時は明治三十七年一月の二十

日である、一方は日の下開山天下無敵と誇る新横綱であり、片方は宿彌道の摩利支天と云はれる怪力士である、此取組一番は實に當場所隨一の好取組と目指され、白熱的の狂氣に近い人氣を呼んだ。

常陸に附くか、荒岩に磨くか、お鯉に取つても身の上の大事な日である。

更に意外な事がある、此一番の勝負を以て、何事か他の重大なる吉凶を卜せんとするかの如き、珍らしい客が見物席に見えて居るではないか、時も時、日露の平和將に破裂せんとする大事の時、我が陸軍帷幄の中心人物たる參謀次長の兒玉大將(當時は中將)が、大勢の部下を率ゐて、正面棧敷に陣取て居られるのである、満場の見物は土俵の上に注ぐ眼を轉じて此の不思議な珍客を見上げつ見下しつした。

兒玉大將は此勝負を何と見た。

桂公の懐中刀として、知られた杉山茂丸氏は、又兒玉大將の恩顧を蒙つた人である、氏が著書「兒玉大將傳」に、其日の大將の言動が寫されて居る、同時に此大勝負の實況も分る、即ち此處に其要領を拜借する。

* * * * *

大將は棧敷の眞先に座を占め、息も繼がずに此の一番を待ち設けた。

「どうぢやね、君達は東か西か」

大將は莞爾として顧みた。

「無論常陸のものですよ」

「乃公は左様は思はんよ」 (中略)

「常陸は強いに違ひないが、荒岩は慍悍ぢや、第一此の勝負に屹度勝ると云ふ意氣組がある、常陸は守勢で荒岩は攻勢ぢや、戦術の原則から言つても、攻勢でなければ勝てぬ筈ぢや」

や」 (中略)

さて相撲の勝負は如何である？、杉山君は書いて云ふ。

「西力士は仕切直し數回にして、諸聲に立上つた、電光石火と突出す荒岩の左腕を常陸はヒツ掴んで泉川に撓めた、荒岩は飛上つて、左を預けた儘、右手に常陸の首を捲き、右足を外掛に常陸の左足に索んだ、其爲めに荒岩の左は横綱が撓めた泉川が外れて、ズルリと

深く入つた、左が入つた以上天下無双で、角力は五分となつた、右に首を捲き右足を索んだ丈が積極的荒岩の徳となつて、トウ／＼横綱を西溜りに寄り倒して、團扇は荒岩に揚つた、小屋は割るゝ許りの大喝采、天地も爲に震動せん許りである。

「どうぢや、乃公の先見は」

大將は四邊を顧みて莞爾と笑つた。

* * * * *

お鯉は夢の如くに此相撲を見、狂するが如くに其棧敷を飛出した。

(八九) 宛如の凱旋將軍

——纏み出す御祝儀一萬參千圓

荒岩が常陸山を倒した日の回向院。

形容でも何でもなく、眞に割れん許りの小屋の中から、雪崩れの如く押し出された見物で、外はまるで海嘯の如き騒ぎ、お鯉は何が何やら分らず、夢中になつて外へ飛出したが、考へて見ると相撲が閉場たら、と云ふお座敷を十幾つ受けて居る。

最負の客の間を免れ／＼て、先づ新福井の村上太三郎氏の座敷へ行く、荒岩最負の村上氏は七八人の藝妓と、今の相撲の話して夢中である。

「荒岩關は今何處に居る、誰か行て探して來い」

いま新橋に居た、柳橋で見た、芳町で逢つたと云ふ、宛如お祭禮の神輿を拜む様な騒ぎ、まつて居ても仕方がないから村上氏は、「切て顔を見る丈でも好い、さあ新橋へ行かう」と、揃つ

て出掛る。

村上氏を築地の瓢家へ置いてき抛にして、お鯉は方々のお茶屋を歩いた、郵船の連中にも逢ひたく、荒岩關にも會つて御芽出度うを言ひたい、何處のお茶屋でも相撲歸りの客で一杯で、何れも荒岩と、美しい藝妓の争奪戦である。

お鯉は花家へ許り五六度行つた、花月で漸々荒岩に會つたが、知らぬお客に一寸御挨拶にと連れて行かれてる間に、荒岩も最負に引張られて行て、行衛不明になつた。

十一時過まで引き廻されて居たお鯉は、前後不覺に酔ひしれて何處々々の座敷へ行つたか分らなくなつたが、翌日になつて、お茶屋の方から、私の處は御挨拶が幾個、お座敷が幾個と知らせて來たのを見て、始めてよくも、左様歩けたものだと思つた始末である。

「お鯉はまだフラ／＼して居るぜ、如何したら可からう」

方々の座敷で、客の方で心配して呉れるが、お鯉の居る時には荒岩が見えず、荒岩が來る時はお鯉が見えなくなつて、夜は次第に更けて行く。

花家から探索に出された者の手に拾はれて、お鯉は辛ふじて荒岩を取捲く郵船の連中に選返

つた。然し却々沈着ては居られない、一座した藝妓が、今荒岩關は何處に居た、彼處に居たと知らせるので、電話などでは駄目だからと、香雪軒からは番頭が怒鳴り込む、新喜樂からは女中頭が泣かん許りに頼みに來る、然し花家の女將はもう殺氣立つて。

「今日許りは、誰様がお怒りになつても、構はないんだよ」

自分のところから荒岩を連れて行かれない様に力味返つて居る。

凱旋將軍にも比すべき名譽の大力士を占領して了つた郵船の連中、それ飲め、それ祝へと云ふ大騒ぎ、酒豪を以て聞ゆる荒岩も、散々方々で飲で來た打止めが之れなので、珍らしく酔つばらつた。

「もう何處へも行かずに、此處で酔ひ潰れても、好いんかい」

廣間の中央に長々と寝そべつて、始めて疲勞した様に、伸をして居る、見れば黒縮緬の紋附の着物に、同じ羽織、下着は無地であるが、寢轉んで居るので、蹴返へつて居る處から、馬の跳上つて居る勝色縮緬の襦袢之は關取が好みの模様で、厭味がなかつた。

「もう何處へも遣らないから安心して寢て居給へ」

最負は有難いもの、宛如我子にでも對する様な、歡待振である、だが此のまゝ東京に居ては、夜中は愚か、夜が明けても煩擾いからと云ふので、驅落者か何ぞの様に、荒岩とお鯉を取捲いた大勢が、こつそりと大森まで落ちのびた。

大森から池上へ行く途中、別荘を開放したと云ふやうな閑靜なお茶屋があつた、一同其處へ落着くと、荒岩は兩方の袂から、鷲掴みに、祝儀に貰つた紙幣を曝け出す、皆なは面白がつて、其紙幣の額を算へて見る。

手の切れる様な百圓札許りである、紙にも包まず裸の儘、束にされたもの、或は捻つた様のももの、素より何所で誰に貰つたのか判らないが、調べ上げて見ると驚くなかれ之が金一萬三千圓餘である。

荒岩は無關心で笑つて居た。

(九〇) 相撲を夫に持てば

——萬一を怖れる女心

すつかり酔つて夢心地のお鯉と、二人、與へられた離座敷に對ひ合つた時、荒岩は前刻一同が算へて呉れた紙幣束を前に、案外眞面目な顔をして居た。

『おかしな心地からでは無いが、今日の相撲は、お前さんの力が十分にあるのだ、最負の旦那方のお心持だけで、荒岩はもう充分だから、祝儀に頂いた此の金は、悉皆お前さんにお禮に上げやう』

荒岩關は大きな手で、件の紙幣束を押し遣つた。お鯉は酔つては居たが、此言葉が耳に入ると、急に面白くなつて、何とも言はずに其座を立上つた。

荒岩は驚いて、お鯉の衣服の裾を、無手と押へた。

『失敬、失敬、あやまつた、勘辨して呉れ、見損つた様で申し譯がない、……餘り嬉しかつ

たので御禮心の積りでしたのだから……』
其の夜兩人がどんな夢を見たか筆者の知らう筈が無い。

* * * * *

大阪の花柳界でも、荒岩の人氣はすばらしいものであつたが、北でも南でも、別に浮き名の立つやうな相手はなかつた。

北の豊田屋の老女將は、大の荒岩最負で、自分に子の無い處から、荒岩を養子にして全財産を遣りたいと云ふ熱心さ、終に其通りの間柄になつた、行々は老女將の氣に入つた妓を落籍して、豊田屋の女將の二代目を襲がせる考へで、既に大體定まつた候補者もあつたらしい。

其頃荒岩は三十四五であつた、如何に力士でも、既う家内があつても良い歳である、況して、常陸を倒して後、關脇から大關になつて居る。

或日の事、荒岩は極くしんみりした調子で、お鯉に相談を始めた。

『貴女が俳優の處へ嫁つての経緯、何も彼も知つて居るから、俺はお前さんが可愛想でならぬ、もう苦勞をさせ度くない、俺の考へでは、力士は大關が頂上で、横綱になつては、面

白い相撲は角れない、だから俺は決して横綱にはならぬ、既う直に年寄だ、養母も自分の氣に入つた許りでは不可ぬから、お前の氣に入つた妓に、豊田屋の後をやらしたいと云つて、お前さんと俺の事を噂で承知して居るのだから、もう藝妓を廢業して、豊田屋の後を暢氣にやつてくれないか』

今更、改めて荒岩の事を考へる迄もなく、彼が力士としては勿論、只一個の人間として、何の不足も無い立派な男らしい男である事は、お鯉は夙に承知して居る、では男の云ふ事を諾いて、其嫁になり、豊田屋の後を襲ぐべきか、と云ふと、左様は行かぬ。

お鯉は、前に市村へ嫁入りして、結局不縁に終つた、これは彼女の忘れる事の出来ない一生の不覺である、俳優の妻女になつて失敗し、二度目に力士の女房になつて、萬一また之が失敗に終る事があるとしたら——これは、想像するさへ厭な事である、といつてこれが必ず生涯の終局まで満足に行くとは、誰が保證し得やう、之は手軽く承知する譯に行かぬ。

『お志は嬉しいが、その事だけは、暫らく勘辨して置いて下さい』

荒岩は頗る不満足の顔をした、自分が折角の申し出を、二つ返事で承知して呉れなかつたの

だから無理もない、然し單純な男だけに、敢て深く其理由を追窮もせぬ、お鯉の方でも又、深い情交には成て居るが、改めて嫁には行けぬと云ふ理由を、明白に説明する言葉が見出せなかつた、談話は終に不得要領に終つた。

此時若し、お鯉が荒岩の云ふなりに大阪へ行つてゐたら、桂公との關係は出來ずになつたかも知れない、人の一生は實に妙なものである。

（九二） 兒玉大將を玄關拂ひ

— 面喰つた瓢家の女將

桂公と肩を並べて、豪い漢になつた兒玉源太郎大將、當時參謀次長の劇職にあつて、對露作戦の衝に當つた骨折は、元より並大抵のことではない。そこで氣分の轉換に時々藝妓達を集めて、イヤ抜きのお遊びとある。

築地の待合かしわ家にふらりと出掛けられては、

「おい、女將、面白く遊ばして呉れ、何か愉快な事はないか」

大將のお座敷と云へば、常も現はれてお對手をする藝妓は、吉次、かしゆん、榮龍、丸子、清香、五郎、お鯉等である。男では後藤新平子、杉山茂丸、日日新聞の朝比奈知泉、時々伊東巳代治伯など。

例の無造作で、飄輕で、惡戯漢の源太郎大將の遊興はまた一風變つて居る、遊びに掛けても

機鋒鋭利で、人を見る事も早く、場合を握む事も素早い大将の事であるから、随分滑稽珍談が澤山あるが、外へ出た時に殊に可笑しい話が多い。

引き締つた鋭い顔、鷲の如くに高い鼻、爛々人を射る眼光、何れも常人のものではないのであるが、元來が極の小男で、お服装が至つてお粗末である。鼠色になつた白縮緬の兵児帯に、小倉の鼻緒の着つた袖の書生下駄、よれよれの烏打帽と來ては、如何見ても落魄した老壯士である、之が前の内務大臣、今の參謀次長陸軍中將閣下と見る者のある筈がない、大将そんな事は平氣の平左で、藝妓を捉まへては、何所か面白い處へ連れて行け、美味しい品を喰ひに行かうと仰やる。

面白く遊ばして上げれば好い役目の藝妓達、好い事にして種々な處へ引き廻す、或時日本橋の美味い物屋の中華亭へ御飯を喰へに行つた、大将例の御扮装で、同伴者も構はず一人速歩で、ドン／＼中華亭の入口に掛つたが、後れた藝妓達がヤツト其所まで追ひ附いた時、大将悄然として店から出て來た。

「御前さん、何したのです」

「いや、駄目ぢやよ、座敷が無いさうぢやよ」

「そんな事はないでしやう」

一同ぞろ／＼と押し掛けると、女中は

「何卒、此方へ」

と案内する、大将も續いて上つて來られる。

「奇怪な事があるものぢや、一人の入る座敷が無くて、大勢だと座敷があるのぢやからね」
床柱を背負つた大将が、六七人の藝妓——何れも新橋一流の妓達許りを對手に、笑ひながら戯談するので、中華亭の女中達は只もう恐縮して了ふ。

これに味をしめた藝妓達は、其後此傳で方々を押し廻る。

「瓢家へは未だ行た事がないが、女將は知てるぞ」

と大将が云はれる、女中のおゑつさんが必と出て來て面喰ふに違ひないから、と、一同は門の外に隠れて、大将だけ一人玄關に差し掛る。

案の如くおゑつが出て來て

「只今、生憎芝居の歸りを二つ許り受けて居りますので、誠にお氣の毒様で……」
案の定である、大將は極り文句を聞かされるや否や、後方を振顧つて。

「オイ、く、断られたぞ、皆な來て呉れ」

そこで美しい伏兵、ワーツとばかり飛び込む、瓢家では面喰ふやら、謝罪るやら、結局藝妓達の悪戯が宜しくないとあつて。

「戯謔も善い加減にして呉れないと、營業に觸るからね」
の、お灸を頂戴して引下つた。

(九二) お土産は銘仙の前掛

——兒玉大將自分の繪葉書を買占る

こんな風に、いつも大將をとりまく藝妓達に、大將お手づから下され物のあつた事がある。
或時の事、大將自身何やら紙包みを御持参に及んで、藝妓達の前に並べ。

「一同に色々お世話になつて濟まないから、今日はお禮を持つて來たよ」

と頷ち與へた、之は大將がお心入の品、皆な有難く頂戴して、さて、何であらうと開けて見ると、之が銘仙の前掛であるには、吃驚した、然し之は大將の悪戯でもなければ洒落でもない、全く眞面目に考へた揚句、女の事だから自宅では前掛も要るだらうと、といふ思召である。何れも始めて銘仙の前掛を締める事になつた、而して其思召だけは辱く頂戴したのである。

此事があつてから間もなく、白木屋の番頭がときわやへ來て

「先日、女の前掛を七本お買になつた御老人がりましたが、お代を拂はれる時、紙入の中

から、チラと兒玉源太郎と云ふ御名刺が見えました、それから其お名と、御寫眞とを考へ合せて見ますと、事に依ると、眞個の兒玉大將かとも思はれますので、直ぐ店の者にお跡を附けさせますと、其御老人が此方へ御入りになつたと申します」

若や兒玉將軍ではいらつしやいませんでしたらうか、と云ふのである。

「まあ、兒玉の御前さんが、お一人で白木屋へ御出になつたんですか、銘仙の前掛は、それでは御前の御目利だつたのね」

そこで、その次お目に掛つた時、お鯉から大將に伺ひを立てると、大將の御挨拶はかうである。

「あゝ、俺一人で行たよ、ナニ、白木屋の番頭が聞きに來たと、俺は萬引はせん積りぢやがなあ」

或時はまた、向島へ遊びに行かうと云ふ事になつて、大將を先達に、例の藝妓の一行列を揃へて、吾妻橋から一錢蒸汽に乗つた、すると船中では御馴染の物賣り男。

「毎度お喧しゅう御座います、先づ御子様の御土産に、軍人さんの繪葉書、大山大將に兒

玉大將……此御方は參謀總長と參謀次長で、此度の戦争を背負つて立つ將軍方で御座います、之は野津大將、乃木大將之は海軍の東郷大將に上村大將、さて此方は綺麗な東京美人、新橋に赤坂、柳橋の姐さん方、合せて一組十二枚、それで只十錢、お土産にはお邪魔にならず、品が輕くて値が廉い——ハイお一人さん、難有ふ御座い、お後は僅た五六人さんよりありません」

酒癖る者は何の氣も附かないらしいが、聞かされる方は聊か閉口、現に兒玉大將の繪葉書が、藝妓の繪葉書と一所に盛んに賣られて行く、若し誰かに見附けられては有繋に氣まりが悪い、眞物の大將は、藝妓達の間に小さくなつて。

「おい、誰か買て了へよ」

と小聲で囁かれる、早速一人が呼賣男の手に擴げられた繪葉書を全部買つて、まづ一安心と思ふ間もなく。

「えゝ、まだ之だけ残つて居りました、幾人さんありません、軍人さんは兒玉大將……」
手品師の鞆の様に、之だけくと取り出される繪葉書を、幾度にも買ひ足したか、一行の向

島に着く迄には全部買ひ切る事は出来なかつた

『あんなに困つた事は無いよ』

と、之も大將の述懐の一つにされた。

浅草へと出掛ける途中の事である、電車もまた一興とお乗せする、兒玉大將藝妓達を對手に、盛んに戯言を云はれて居たが、車中禁煙の事に氣附かず、迂濶り葉巻を出して喫ひ始めた、車掌は遠慮がない。

『お煙草は御遠慮下さい』

と、大將をきめつける。

『ハイ、悪う御座いました、俺の國の電車と違つて、東京の電車は煙草を喫んでは駄目ですかね』

テレ隠しに戯言を言ひながら、素直に煙草をすて、澄ました顔、藝妓達は袖をつゝついてクス。

(九三) 參謀本部へ鶏肉ごおでん

——憲兵の手帳へ藝妓の名

お國柄の故でもあるまいが、兒玉大將妙に下帯と云ふものを用ゐられない。軍服は素より洋服の時は、それでも一向差支へないが、和服の時には時々傍の者が迷惑する。

そこで藝妓達と多勢、浅草の大金へ鶏肉を喰べに行つた時、氣の利いた藝妓が浅草の仲見世で猿股を二つ買つて、大金へ行てから無理に願つて大將をお湯に入れて、その猿股を用ゐて頂いた、残りの一つは掛け替ですと、懷中に押し込む。

『これや良い品を呉れたね』

大將は破顔一笑。

大將が浅草へ遊びに行かれたと云ふ事が分ると、瓢家に居た後藤新平子や杉山茂丸氏が、跡追掛けて大金へ飛んで來た。

「大將は！、よくお湯に入られたね」

と驚きながら、一同で鶏肉を喰べる事になった、各自から會費を徴發して、其集つたお金だけで喫べると云ふ申し合せである、當日の幹事には柳橋の金八と、お鯉とが選ばれた。

二人の幹事が鍋に向つて箸を取ると、八方から、幹事、幹事、幹事さーんと、用も無いのに呼び立てられて、喰べる暇もない間に、食事が終つた。

疲勞れたのと、咽喉が乾いたので、お鯉は果實でも出したら、と、幹事の一人の金八に相談した、金八は會費が一杯にでもなつたのか、意外だと云ふ顔容をして

「不可ないよ、果實なんて贅澤だよ、咽が乾いたら、水でも飲んでお置き」

この「水でも飲んでお置き」の一句が、平素の生活に似も附かない警句であつたので、一同ブツと吹き出したが、其後も時々想起しては、水でも飲んでお置くと、大笑ひをしたものである。

此日十人内外の男女で、鶏肉を喫べた事驚く勿れ五十八人前！

兒玉大將は大金の鶏肉が餘程お氣に入つたと見えて、直ぐ御注文が出た。

「此の肉は美味しい、明日美味しい處を澤山、參謀本部へ届けて呉れ、大勢で喰ふのぢやから」何時でも、御自身美味しいと思ふ物は、必ず部下の者にも味はせる、人の上に立つ人の心掛は、また格別、それなればこそ一同生命掛けて、戦争をする氣にもなれるのだわね、と、藝妓も亦軍國の事を解する。

兒玉大將には、まだく奇抜な逸話がある。

大將或晩の事、茅場町の通りで、おでんの立喰をされた、老人夫婦が屋臺店で、味噌つけおでんと、燗酒とを商つて居るのである。

此おでんが又頗る大將のお氣に入つた。

「おい、爺さん、此おでんを三百人前ほど、明日參謀本部まで届けて呉んか」

よぼくのおでん屋主人、三百人前の注文に面喰つた。

「いや、兎てもく、お間には合ませんよ、私共はそんな資本もなし、また之が一度に出来る品でも御座りませんから」

「うん、成程左様か、よし、それでは此の道を斯う行くと、かしは屋と云ふ家がある、

明日でも其家へ来い、資本を出して遣るからな』

茅場町のおでん屋の爺さん、不思議な縁から大將のお世話になり、数日の後、参謀本部の將校達に、美味しいおでんを十分に差上げる光榮を荷つたと云ふ。

* * * * *

お座敷で夜が更けて、参謀本部内の官舎にお歸へりの時など、藝妓達が、「サア皆まで送つて上げまじやう」、「有り難い送つて呉れ」と、一同がや／＼霞ヶ關を上つて行く、時が時であるから、彼の邊の警戒は殊に厳しく、巡查や憲兵が到る處に立て居る、先へ立つた暢氣な藝妓が、迂濶り憲兵に捉まつて。

「何者だツ」

突如り手帳を出して宿所姓名を書き留められるので、膽をつぶしてゐるところへ一行が追付く。其の内大將の居る事が分つて、憲兵も取調べを差控へる。今度は取調べられた藝妓が抗議を持ち出す。

「御前さんのお名前は手帳に乗らずに、私達のばかり書かれてはイヤです、お疑ひが霽れた

ら、是非取り消して頂きたいわね』

大將も詮方なく、取りなし顔で憲兵に斯う仰しやる。

「此妓共も少しは怪しい奴だが、今日の處は勘辨して、闇魔帳を消してやつて呉れ』

(九四) 橋渡しは山縣老公

— お役者さんがお百姓

幾度か風雲急を傳へられた日露の國交は、二月の九日、仁川沖に火蓋を切つた海戦を序幕にして、たうとう斷絶してしまつた。

戦争に経験のない日本ではないが、相手が手剛いロシアと知つてゐるだけに、國を擧げての緊張ぶりは、とても物凄いはかりであつた。一步過まれば取返しのかぬ大切な時機に當面したからである。

時の内閣は第一次の桂内閣、軍國の機務に執掌する桂太郎公(當時は侯)が重い責任を背負つて肝膽を砕いた事は、職掌柄とはいひながら、一と通りでなかつた。四六時中頭腦の休まる間とはなく、あれで善くも身體が続くと、傍の見る目も氣の毒な位であつた。

元來桂公には、軍事と政治の外に、別段これといふ道樂の持ち合せがなかつた。阿な氣分の轉換に役立つものはなからうか、當時の元老、大臣等の一樣に思ひ惱んだのが、これであつた。中にも最も此點に心配したのは、山縣公であつた、世間ではげんかく其ものゝ様に見なされて居たが公はあれでなく、行き届いた粹なお仁であつた。

その山縣公の胸に、ふと思ひ浮ぶものがあつたらしい。

お鯉は前にも記した如くに、最初藝妓に出た時から、山縣公から一方ならず御最負を被つて居る、數々目白のお邸にも召されて、御話しのお相手を勤めた事もあつた。

某日の事、山縣公のお座敷で、濱町の常盤家に召された、其席には公と、桂公とのみである。此日兩公とも極く打解けた態度で、六かしい談話などは頓と無つた、酒間老公は例の低い調子でお鯉の事を桂公に話される。

「此妓が、お役者さんに嫁に行つて、出されて來たお鯉だよ、最負にして招んでやれ」
之が御紹介の言葉である、お鯉は遠慮なく口を挿れて。

「山縣の御前さんは、何時でも左様仰やるのですが、何してもお百姓さんと聞えるので、厭で御座いますわ」

お國の訛りの故であるか、老公がお役者さんと仰やる言葉が、恰度お百姓さんと聞えるのである、お鯉は態と夫を厭がる。

『ほう、お役者がお百姓か、面白いな』

桂公は愛嬌よく笑つて、合槌を打たれた。

(九五) 巨頭公の直接談判

——戀の參謀は一代の名士揃ひ

それから間もなくの事である。また常盤家にお越しの山縣老公は、常盤家の女將代理として、お座敷一切を切り廻して居る女中頭のおきよに、こんなお話をはじめられる。

『どうだ、桂には之と云ふきまつた妓は無いのか』

『エ、ほんたうに無いんです、桂の御前はまだきまつた人は有ませんのです』

『ソーカ、それでも困るね、何とかして見つとも無くないのを極めて、世話をして置きたいと思ふがな、おきよ、おぬしお鯉を世話してやれよ』

由來、常盤家では決して客に藝妓の世話をしないのを、一見識として居た。

『私の處では御存知の通りですが、外ならぬ御前さんのお話ですから、何卒して左様したいと思ひます……幸吉にも一つ相談して見ませう、それにお鯉さんは子供の時からよく知つて

居るのです、此家へしよ遊びに来て居たのですから」
一日常盤家へ行くと、おきよから桂公の話しが始められた。お鯉は深くも考へず、淡泊に断つた。

「でもね、山縣の御前さんが心配して、あゝまで仰やるのだから、よく考へて置いて頂戴よ」
それから又、間もなくの事である。

山口縣出身の老紳士に田嶋信夫と云ふ人があつた、同郷先輩の間に伍して、相當の顔も利き、殊に井上侯の知遇を得て居た、一日川崎に在る田嶋氏の別荘で、井上侯が主人役で桂公、兒玉大將、其他四五人の友達を招待した事がある。煩鎖い世間を避けて、心置なく一日の清遊を試むると云ふのが表面の趣旨であるが、實は此種の會合には、必ず何等か政治上重大なる意味の含まれて居ない事がない、此日も一としきり人拂ひの談話があつた後、緩りと飲まうといふのであつた。

料理は御最負の濱町の常盤家、例のおきよが出張して采配を揮ふ、新橋の幸吉も若い綺麗な處を引き連れて来て居る、お鯉も無論其席に居た。

酒三行、席が漸く亂れて笑ひ聲が高く聞ゆる様になつた頃、おきよは幸吉と兩人で、桂公の前陣取り。

「桂の御前さん、あなたは今ロシヤを相手に、六ヶしい談判をしてゐらつしやるんでせう、それだのに女の一人位何です、直接談判をなさるがいゝぢやありませんか」

大分お酒の廻つた兒玉大將、ヤレ、とばかりそばから女達に聲援する。

「夫が善からう、場所は四疊半では小さくて面白くないぞ、庭の藤棚の下が好い、あそこには鯉が居るからね、早速取り掛れよ」

座敷から押出されるやうにして庭に下り立つた桂公とお鯉の歩みは、期せずして池畔の藤棚の下に運ばれた。

(九六) 藤棚の下に戀を語る

——初の御見は鯉洲の川崎屋

宰相の巨頭と美人の潰し島田との上には、今を盛りに咲き綻びたゆかりの色の藤の花房が、五月の陽光にうつとりと垂れ下つてゐる。そこで桂公は靜かに口を切つた。

「如何だ、厭なかね」

時は白晝、しかも衆人環視の中といつても宜い、色戀の掛合ひも、かう眞正面から切り出される、さすがのお鯉も戲謔にして外す譯にも行かない。その答へも自ら眞劍になる。

「厭と申すわけではありませんが、——私は種々と履歴の多い人間ですし——、一體貴所方は伊藤の御前を初めとして、人を玩具に爲さるから否です、いくら藝妓でも一人前の人間ですからね、生涯の事を考へて下さるんで無ければ、御免を蒙ります、只それ文なんですよ」
聞いてゐた桂公の巨頭は、重く首肯いた。

「善し、了解つた、面白い事を云ふね、夫は確乎に承知した」

* * * * *

兩人が座敷へ戻ると、此にはしめ子、おまる、小蝶、お里、等が待ち構へて居る、之が何れも公とは、以前にいんねんのある妓たちであるから、寄つて集つて囃し立てる。

「桂の御前さん、お芽出度う、今日はお持ち合せがあるんだ由ですね、さあお出なさい」
突如、猿臂を伸して公の懐中から紙入を抜き取つて了ふ。

「善く知つて居るね」

「知つて居ますとも、兒玉の御前さんから、聞いてるんですからね」

「悉皆奪られては困る、入用があるかも知れないから、と井上が渡して呉れたのだからな」
金と云つても僅か二三百圓の紙幣である、公は平生現金と云ふものを持って居た事が無い、よく氣の附く井上侯は、此の日特に、萬一の入用にと渡して置いたのである、之を兒玉大將が知つて、藝妓達に素破抜いたのだから堪らない、中の紙幣は全部罰金として美人達にめしあげられて仕舞つた。

離れの二階の出窓から、始終の顛末を眺めて居た兒玉大將は、上から大聲を浴せる。

「おい、桂、如何だつた、クロパトキンと條約が出来たか」

前年陸軍大臣として我國の狀勢を視察に來られた露國のクロパトキン將軍、今や極東總督アレキセーフの後を襲けて、大兵を率ゐて滿洲の野に虎視耽々である、將軍は實に我國朝野の目標である、クロパトキンたる一語は、即ち將軍連の目標を意味する。

お鯉もまた、クロパトキン將軍の宴席に侍し、自慢の帶を將軍から所望されたが、終に斷つて贈らなかつた事がある、クロパトキンの一語は、お鯉の耳にも一種の意味を以て響く。

桂公は欣然として、答へた。

「うむ、クロパトキンを生擒つたよ」

其後藝妓を廢めて桂公の處へ赴くまで、公を始めとして、山縣公、伊藤公、井上侯、兒玉大將等は、お鯉を呼ぶのに、其名を用ゐないで常にクロパトキンと呼んで居た、本家のクロパトキン將軍が聞いたら、意外な代理人の出來たのに、驚いた事であらう。

兒玉大將は桂公の談判首尾よく成立したとの報告に満足して。

「さて此までは此の兒玉が參謀じやが、之から先の、粹な事の參謀は俺には出來ぬ、御免じやよ、其の方は井上侯が適任じや、宜しく頼むべしじや」

此で、參謀長 交替となる。

兒玉大將の機敏な作戰の後を承けて、新たに桂公、お鯉併合情約の實行を見るべく、參謀長を引受けた井上侯は、あれか是かと思案の末、聞多の昔、東海道五十三次を上り下りした際、穴子の蒲焼の美味かつた事を覚えて居る鮫洲の川崎屋こそ屈強の場所と、左右の女將連や、藝妓達を顧みつゝ

「久々じや、川崎屋へ行かう」

との御布れである、之は大變な事になつたと、中には眉を擧げた女もあつたが、言ひ出したら後へ引かぬ井上老侯の御氣性を知て居る面々、行列揃へて、鮫洲の川崎屋へ、

(九七) 參謀長の交替

——粹な家は汚ないもの

井上侯の采配に従つて、附き従ふ女武者、瓢家、田中家の女將連を始め、數多の藝妓達、それに馳せ加はる面々、兒玉大將、室田義文老人など、一大隊許りの連中が突然押し掛けたので川崎屋では大に狼狽した、人が人、時が時であるから、警部や巡査の警衛も却々嚴重である、近所の者は何事かと驚いた。

井上侯御自身は如何な思ひ出があるか知らぬが、川崎屋は粹な家でも何でも無い、時代な田舎式のお茶屋である、兒玉大將は遠慮しない。

「粹な家か知らんが、甚く汚い家じゃ、然しもう俺は非役じゃ、後はおぬし達で、善い様やれよ」

大將はさつさつとお歸へりになる。

案内役の井上侯も来て見て當てが外れたといふお顔つき、さりとして發頭人だけに專賣の叱言も云はれず。

「まあ汚くとも我慢をするさ」

之れから賑やかに一騒ぎして、一同川崎屋に磯臭い夢をむすんだ。

お鯉が、時の宰相桂公から特別の知遇を得たのは、實に此の時に始まる。

* * * * *

其の後の桂公とお鯉の姿は、一週に一度十日に一度ぐらゐ、新橋界限で見かけられた。何といつても、もう其頃は議會やら戦争やらで、定まつた宴會位の外には、軍國の總理大臣たるもの、自分勝手の遊びに耽けることも出来なかつたのであらう。たまに田中家などへ見えても、多くは山縣公井上侯と一緒に、お鯉が顔を出す。

「お鯉、どうかね、よく桂を慰めてやつてくれよ」

兩元老、きまつてかう仰つしやる。

(九八) 勇ましい軍の門出

返事を先に書く兒玉大將

戦争は漸く本舞臺に入て、何々師團の動員、何々司令部の出發となり、街頭には「大勝利」の號外に羽が生えて飛び、停車場は日となく夜となく、出入の人で黒山といふ大景氣。出征軍人の送別會は、各地の花柳界を賑はした中にも、新橋は場所柄だけに、取分け盛で、左様した宴會が毎晩のやうに續いた。

兒玉大將もしばく、斯様な宴會に見えて、御主人役を勤めてゐられたが、結局大將自身もお客となつて送られる人になつた。

如何に戦争の門出にせよ、豈敢に大將ほどの人が、萬々の事などがあらうとは思へないが、時が時であり、お役がお役であるから、何とも云へない氣持で、席に侍する藝妓達も胸が一紙になり、今宵の別れがお名残り惜しい。

その夜宴果て客散じて後、大將は日頃御最負の藝妓を集めて。

「おぬし達、時々俺の處へ手紙を寄越せよ」

「えゝゝ、上げますわ、御前さんも下さいな」

「うん、然し俺は生死が分らぬ、逆も返事を出す事が出来まいから、左様じゃ、返事は今夜此處で書いてやらう」

誠に面白い思ひつきでもあり、床しい武將の雅懷である。

紙筆が其所に持出されると、大將はよし來た、と許り、片端から筆を揮はれる。狂歌、都々逸、飄逸な繪、讀めない詩、謎のやうなものもあれば、女大學にある様な文句もある、當夜其席に居合はした藝妓や女中は、皆なこのお墨付を頂戴した。

明治三十七年七月六日、滿洲軍總司令官大山大將、總參謀長兒玉大將は、多數の幕僚隨員を隨へて新橋停車場を出發された、停車場の見送りは大變な人であつた、新橋の藝妓達も亦、お場所柄をも顧みず、豫ての御約束通りお見送に出掛た。おびたゞしい劍光帽影の間に伍する紅裙連の一團は、そこに異様な光景を作り出した。お鯉達があわたゞしい御挨拶の暇もなく、黒

山のやうな群集の口から迸しる萬歳々々の聲を浴びながら、大將一行を載せた汽車は靜かに帝都の玄關を離れて行つた、——赤い夕日の滿洲へ。

(九九) 音に聞えた大雷

——似た人故に見しうき目

鮫洲の川崎屋で桂公と、關係ある仲になつてからも、お鯉は相變らず新橋の名妓として、來る日も來る日も忙しい目を見て居た。

或る日、幾つかのお座敷を廻つた後、お約束であつた、よし町の新福井で兜物の仲買村上太三郎さんのお座敷へ顔を出すと。

『お鯉さんか、待つてゐた。けふは一つお前さんに酷似といふ評判の女が、洲崎にゐるといふので、それを見に行かうと、本物の來るのを待つてゐたところだ』
その評判の女は、洲崎大八幡の花魁で、お鯉に生き寫しといふので、突き出しからお職を張つてゐるとやら、兜町や魚河岸から、わざ／＼見に言つた好事家もあるといふ噂。
さあ、これから一同して出掛けやうといはれて、お鯉は一寸躊躇した。

「私は、後に瓢家の約束があるので……」

「ナーニ、大急ぎで行つて来たら間に合はないことはないサ」
お鯉もたうとう断り切れなくなつた。

そこでお客の村上さんを先頭に、藝妓幫間の大連、三人挽の人力車を連れねて洲崎へ飛ばす。
引手茶屋から送られて、一同大八幡へ押掛けたが、見ると二階の欄干に凭れて往來を眺めて
ゐる花魁がある。

「おや三千歳の品をよくしたやうな花魁がゐるぜ」

「あらッ、お鯉さんに似てる」

「あれだ、彼女に違えねえ」

登樓て呼んでみると、果してその女だつた。一同は物珍らしさうに兩人を見較べて、色々の
評が出る、だが見られる方は餘り有難くもない。

「花魁としては、すつきりし過ぎてゐるわね」

「そこが似てゐるところなんでせう」

然し當のお鯉自身は、餘り自分に似てゐると思はなかつた。

その内だん／＼時刻が経る。お鯉は酔の廻つた中にも大切なお座敷のことが、氣になつて來
た。

「私や大變なことをした、瓢家へ行かなければ……」

といひ出すと、村上さんも心配して、それぢや直ぐ引返してもいゝが、一體その瓢家のお客
は誰だと聞く。

「井上の御前さんに、桂の御前さんです」

そいつは大失敗……とばかり、村上さん大狼狽で、遽に馬車を命じて一緒に瓢家へ馳けつ
ける。

着くと村上さんは、額を疊にすりつけないばかりにして。

「今夜は私が全く悪かつたのだから」

と頻に帳場へとりなしを頼んでゐる、場合によつては、私から直接にお詫びを申上るからと、
下の小座敷に控へて形勢を案じて居る。

夜はもう疾くに十時を過ぎてゐた。

二階の廣間では、井上侯が脇息に凭れて、ちつと清元を聞いてゐられたが、おづく入つてきたお鯉の姿を見るや否や

「馬鹿ッ」

霹靂一聲、例の御落雷。

「何處に行つてた、ナニ洲崎——洲崎とは何だ、馬鹿ッ、怪しい奴ぢや、もう桂は歸る時刻になつてるのぢや、早く下の座敷へ行けッ」
從來思ひ切つて人に怒鳴られたことのないお鯉は、これほど怒鳴られてもあまり恐いとは思はなかつた。

方々で飲んだお酒が廻つて、その時はもうすっかり酔つて、足も疊に着かない程であつた。女中に身體を支へられて、ふらく入つて行つた下座敷、襖を開けて貰つてやつとこのことこに坐り、お詫を申上げる挨拶もいどろもどろである。
泰然と座を構へて、靜かにお鯉の容子を眺めてゐた桂公は。

「おぬしは、そんなに酒を飲むのか」

落ちついた口調で、しんみりこれだけいはれたのであるが、井上侯の落雷にも増して、この情味を含んだ一語が、ひどくお鯉の胸を打つた。

お鯉はおのづと頭の下る思ひがして、その場にくづ折れてしまつた。

* * * * *

お鯉を洲崎くんだりへ引つぱり廻した責任を感じて、その夜別間に控へてゐた村上氏のこと
が桂公の耳に入り、大變氣の毒がられたが、それが因縁で後には打解けた交際になつた。さすが
は株屋さん、村上氏の機敏なところがよく窺はれる。

(100) 運が悪かつた六代目幸坊

— 鹿島のぼんたさ好一對の貞節 —

お鯉に善く似たと云ふ妓がもう一人あつた、夫は芳町の藝妓ぼん太郎である。

後年、お鯉が浮世の情縁から遁れ去つて、頻りに安心立命の境地を見出し度く、芝の永平寺出張所に参詣する都度、屢々寺の役僧が。

「安藤さんの妹さんが、よくお参詣に入つしやいます」

と云ふ、不思議な事もあるもの、自分には肉親の妹と云ふものは居ない筈だが、と、様子を聞いて、何んなお方かと思つて居る中、恰度其の方がお見えになりました、と云ふ寺僧の注進から圖らず引合されて見ると、知る人である、それは、二十何年前芳町で艶色を馳たぼん太郎其人であつた、變つた處で、變つた人にと會釋し合つて、互に其奇遇を喜び合つた。

* * * * *

其昔、芳町の藝妓屋から、ぼん太郎と、與太郎と云ふ二人の雛妓が出て居た。

その與太郎は、其の名の如く、與太で終つたかどうか知らぬが、ぼん太郎は決してぼん太では無かつた。

時は新橋全盛時代である、柳橋の金八、日本橋の小花、やま子等の一流處は、何れも自分の土地で商賣をしないで、毎日新橋へ招ばれて、名士、富豪のお座敷に侍つて居た、ぼん太郎もた雛妓ではあるが、其仲間にあつて、常に新橋へ現はれて居た。

此のぼん太郎却々生意氣な妓で、雛妓の癖に白粉は附けず、花簪は挿さず、友禪の衣裳は着ずと云ふのである。されば珊瑚珠の簪に蒔繪の櫛、縞お召の衣服と云ふ風をして、十六位の妓が可愛らしい事は一切言はずと云ふのであるから、随分變つたもので、姐さん達の目を聳てしめた。

お鯉が最初の藝妓の時、小文が生きて居た時分である、餘り面白い不思議な妓だから、一日招んで調諱つて遊ぼうと相談して、小文と兩人で玄治店の菊水へぼん太郎を招んだ。

だん／＼話をして行た處が、此方が調諱ふどころの始末でなく、小文やお鯉の前をも憚から

す、ぼん太郎の曰く。

「姐さん、私一つお願ひがあるのよ、私はね、音羽屋の幸ちゃんに岡惚れしてるのよ、是非呼んで會はして頂戴な」

大變な事になつた、新橋一流の姐さん二人は、遂々此の十六になる雑妓に敗けて、俳優の取持役まで仰せ附けられて了つた。

六代目は其頃、十七位であつたらう、未だ戀の諸分や、隠れた座敷の味など解らう筈がなかつた、音羽屋へ出入る不良の大人達は、それを面白がつて騒ぎ立てる、遂々市村が。

「俺が教へてやらう、今夜宿り掛で来いよ、幸坊」
一晚掛りで、何事か教へられたと云ふ噂さであつた。

* * * * *

場所は濱町の待合相生、松と松との若みどり、露の契りを結ぶには相應しい家である。

お膳を前にしたぼん太郎は、十六でも一端の姐さん振り、相手の六代目は未だやんちゃん幸坊に過ぎない。

まゝ事のやうな會食が始まる、すると、急に、座を立つたり坐つたり、オド、オド、しだしたぼん太郎が突然六代目に云つた。

「幸ちゃん、ほんとにお前さんは運が悪いよ」

幸ちゃんは目を白黒さして考へたが解らぬ、斯様談話は市村の兄さんにも教へられなかつた、何の事だか土臺分らぬ、然し黙つて居ては尙分りつこない。

「運が悪けりやどうするんだい」

幸ちゃんらしい、質問である。

「仕方がないから、御飯を喰べて、今日は歸へりませう」

ぼん太郎の答へは簡單明瞭で、尙此の際幸ちゃんの取るべき道をも教へてゐる。

運の悪い小さい役者は、食事を済すと、早々と歸つて行た。

例の不良の大人達は、どうしたくと六代目に聞く、幸坊の報告に曰く。

「俺は運が悪いんだつてさア、——運の悪いのはね、飯を喰つて歸へるんだつて……」。

菊五郎の幸ちゃん、其の後始終からかわれたものだ。

「幸ちゃんは、運が悪いんですつてね」

劇界の麒麟児、六代目屋上菊五郎に對して、お前さんは運が悪いよと云つた、芳町のぼん太郎は、決して尋常妓ではなかつた。

即ち其の後兜町で鳴らした株式仲買の大澤幸次郎氏に落籍されて、其の世話になつた、間もなく大澤が失敗して、如何にもする事が出来なくなつた時、ぼん太郎は此落魄した大澤を棄てず、共に貧乏生活をして居た、或時八丁堀の、とある横丁で、味噌漉を提げたぼん太郎のやつれ姿を見掛けたものがあつた、忽ち評判が傳はり、鹿島のぼん太と好一對の貞女だと喧傳されたものだが、苦節を守つた功空しからず、大澤は其後機運再會して、昔時の榮華を繰返す事が出来る様になり、ぼん太郎も以前の華美な生活に入る事になつた、そんな事からの發心か、爾來永平寺へ參詣する様になり、其面影のお鯉に似て居る爲め、永平寺の役僧達から、お鯉の妹と誤解された次第である。

(101) 瓢家へ買切りのお座敷

月に百七十圓では割に合ひ

國家の多事多難に處する時の宰相が、頭休めとあつてもなか／＼お出掛けになれぬ、誰彼がお招きしても、容易にお出掛けが無い、お相手のお鯉、公爵がたま／＼お越しといふ場合にも、他のお座敷に招ばれてる際は急のお間には合はぬ譯けである、這般の事情に通ずるお傍の者達には、何とか一策がなければならぬ筈である、時に現はれたのが世話すきの平岡大盡、兎に角私にお任せなさいとあつて、これは寧そお鯉を買切つて置くが宜しいと云ふ事になつた。その買切りの條件はと云ふと、一日にお約束が一つの計算であるから、一ヶ月のお手當が百七十何圓にしかならない、其頃お鯉等の顔觸は、大抵一ヶ月三百圓以上の収入があつたので、勘定に疎いお鯉にも、之は割に合はない話だとは判つたが、山縣の御前や井上の御前などが、お目に懸りさへすれば。

「桂を慰めてやつて呉れよ」
と仰やるのを思ふと、お手當の多少などを云つてゐる場合でないと思つて、買切られの事を承知した。

處が此買切のお務が大變である、朝の九時から夜の九時まで、處は瓢家の平岡さんのお座敷へ詰切で、たゞ坐つて居るのである、此には平岡さんが、自分の買切の中村屋のおきんを始め喜代次、お衆、三味線彈の梅吉、幫間の魚見太夫、菊平などを集めて、新曲へ手を附けたり、東明節を教へたり、毎日々々飽もせず遊んで居るので、お鯉も其中に坐らせられて、一日三圓の御祝儀を頂くのである、決して樂な仕事ではなかつた。

一週に一度か、十日に一度、桂公が見える外には、毎日只斯して坐つて居る、そして夜の九時になると、平岡さんがお鯉の自宅まで送つて呉れる。其途中銀座の夜店の道具屋を素見して、種々な道具を買ふ、お鯉は道具好きなので、毎晩夜店をあさり歩くのがせめてもの楽しみ、同じ事を毎日繰り返して居た。

(1011) 飛んだ濡れ衣

——總理大臣を向ふに廻す色男

かうした退屈の日を送つて居るところへ、或る日田中家の女將が、川崎芳太郎氏の上京を報せて来て、是非お目に懸りに來る様にとの事であつた。

川崎さんは神戸に造船所を經營して居る人で、お鯉はかねてから御最負をうけてゐた。上京の都度何かしら土産物をお持ちになる程のお馴染であつた、だがお鯉は氣輕に行く譯にゆかな

50
『女將さん、私は駄目なんですよ、何所へも行かれないんですもの』
お鯉は、孰々買切られの不自由さをおこつ、女將も之には同情して。

『それは善く分つてゐるんだが、川崎さんはいつもの通り直に歸るんだしね……、それからお土産の上布も届いて居るのよ、またいつものやうに武藏屋の玩具でもお子さんにお上げす

るんだらうから、それに外の家ではなく何もかも分り切つて居る私の家だもの、後で知れてもお客は川崎さんだから、かまわ無いと思ふよ』

久々の事でお目に懸り度くもあり、お土産のお禮も云ひ、お返しもせねばならぬ、あれこれ考へれば行かねばならぬ方に理由が多い様なので、結局行く事に決めたが、平岡さんに話しては迎てもお許可が出さうもないので、遂々無断で行く事になり、平岡さんが例の通り九時に家へ送つてくださつてから出掛ける事になつた。

場所は田中家、お座敷には、外に松方さん成瀬さんも見えた、實子、おひさ、なども居合はせて却々の賑やかさである。

「神戸から態々報告に來た譯けでもないが、是非お鯉さんに聞かせたい事があるんだよ、幸次郎がね、大阪のおまさに惚れられてね、そして皆でお鯉に似てるからつて、押しつけて了つたんだよ』

温厚長者の川崎さんが、際どい處で素破抜く

「それは黙つてろ……嘘言だ〜」

一角の強者幸次郎さんも眞赤になつて辯解する。まだ〜お若かつたのである。成瀬さんが、傍から彌次る。

「幸ス、もうこれからはお鯉が好きだなぞといはさぬぞ』

「私も幸次郎さんに好かれると困るわ、亂暴で〜川崎さんの方が温和しくつて宜いわ』

お鯉も遠慮なく、平氣でこんな事をいつて、騒いで、遊んで、遅くなつて、それから實子、おひさなどと、一緒に歩いて自家に歸つた。

ところが此の一條から端なく意外な騒ぎが持ち上がった。

* * * * *

其頃、珍らしい事では無かつたが、實業家の主だつた人達に、大官連を混じえて瓢家に集つたのが、お鯉が田中家の川崎さんのお座敷に出掛てから二三日過ぎての事である、其の席には松方老公井上侯も在られた、川崎さんも出られ、平岡さんも例の如くに居られたが、桂公は御用の都合とかで見えない、このやうな席には極つて招ばれる藝妓達が居る。お鯉は此の日、いつもの通り朝の九時から平岡さんのお座敷に詰めて居たが、急に平岡さんがお客をするので

其の席に出てくれと云はれ、家から着物を取寄せなどさせられた、買切られの身の上が、平岡さんの勝手にはお座敷にも出されると云ふ事が内心面白からず思はぬでもなかつたが、まづまづと不承して其席に出た。

すると、平岡さんは突然に、例の皮肉な口調を弄して、川崎さんに一太刀浴せる。

「川崎さん、あなたは却々おゑらいんですね……田中家のお出合ひは粹氣な事で、……」

兎に角、總理大臣を向ふに廻して、凄じ手腕を見せやうと云ふんですからね」

眞向から斯うやられたので、生來溫和な川崎さんは、何とも云ひ返す事が出来ず、只窮つたやうな顔をして伏目になつて居る。

耳の悪い松方老公、珍らしく夙くも此言葉を聞き咎めて。

「なんだ、く、川崎が如何した」

問ひ質されて、何人も説明する者もない、一座は白け渡る、老公は日頃餘り花柳界に出入されないが、昔時一寸の間お世話になすつてゐた福山田のおまるが一座して居たので、其のおまゐるに今の説明を求められる。

「何が、どうしたと云ふのじや」

「いゝえね、平生から川崎さんがお鯉さんを最負にして居て、今度神戸から出て來られたので、田中家へ招かれて行たのださうです、處がお鯉さんは桂の御前さんに買切られて居るので、それが問題になつたらしいのです」

何れも變な顔をして居る中に、下を向いた儘、ジーツと黙つて居る川崎さんを見て、お鯉は餘りの事と氣の毒でたまらない、それなのに人の氣も知らないのが。

「ヨウ……ヨウ……川崎さん、お盛んな事ですな」

などと茶々を入れる、どうも穩やかならぬ事になつた。

事件の内には女がある、女の争ひには嫉妬がある、商賣敵がある、瓢家へ買切られて居るお鯉が、内證で田中家へ行たと云ふ事は、覇を花柳界に争ふ待合同士には、容易ならぬ問題であつたらう、そこに持つてきて自分に一言の斷りもなく、お鯉が川崎さんのお座敷に顔を出したと聞いた平岡さんが、大通人の面目を踏潰されたと思つた——其感情も手傳つて、さてこそかかる流言蜚語を生んだのであらう。

(二〇三) 江戸ツ兒藝妓の意氣

乾すに難きさんだ濡衣

總理大臣を對手に廻して、其買切の藝妓を横取りした様に、場所もあらうに、元老大臣の居並ぶ席上で素破抜かれた川崎芳太郎氏は、全く途方に暮れて了つた、其場で直ぐ冤罪なる旨を言張つて了へば、何でもなく濟んだかも知れぬが、柔和な性質で夫も出來ず、殘に對手が名代の平岡氏と來て居るから、迂濶り辯明も出來ない、遂々理が非に墜ちて其夜は引下つたが、如何にも残念でならぬ、殊に桂公に對しても、其儘でおく譯に行かぬので、翌日松方老公を煩はして、田中家へ平岡氏其他をお招きした。其の席上。

「昨日平岡さんが云れた事は全く間違です、決して左様な事はありません、一々お斷りも出來ませんから、今日お返しながら來て頂いた次第です、私は一個の商人です、その様な事を、評判されると、誠に困りますから」

眞面目に辯解して居るのを聞いて、お鯉は昨宵と云ひ、今夜といひ、川崎氏のお心のうちがお氣の毒でならなかつた。

然し此辯明を聞いた平岡さん其他の面々、果して正直に、其言葉通り受取つたか如何か、乾かす由もなき此の濡衣、とんだ事になればなるものである、さて〳〵世の中はむづかしい。

* * * * *

赤坂の瓢家は溜池の河岸で、永田町の首相官邸とは近かつた、桂公は頭腦の重くなつた時など、時折り一人の警部を連れて散歩ながら此家へ來られる、お鯉が此家でお目に懸ると、公は笑ひながら。

「お前は、神戸の川崎に關係があつたと云ふじやないか」と仰やる。

「いゝえ、ありません」

お鯉は平氣で否定する事が出来る、事實無いのだから強いものだ。

「呼ばれて、行つた事があるだらう、瓢家が來て、左様云ふたよ、しかも夜る夜中おぬしは

川崎に逢に行つたさうじゃないか」

「あゝ其事ですか、善く解りました、左様仰やれば、平岡さんが川崎さんを、満座の中で恥を搔したり、貴方のお忙がしい中へ瓢家がそんな事をお聞かせしに行つたり、種々馬鹿々々しい事だらけですが、之は悪戯をする人があつてした事です、言譯がましい事は厭ですから申ませんが、私が川崎さんの處へ行たのは、出合つたのではありません、田中家は貴方も知つてる家ですし、何もかも分つてるお女将さんが、川崎さんとそんな事をさせる譯もなし、私に御信用が無いとしても、大抵お解りになりませう、然し私にも考がありますから、お暇を下さい、皆さんに宛然玩具の様にされるのが厭です、私だつて人間一疋の積りなんですから」お鯉も今は黙して居られず、かうなつては言ふ丈の事は云はねばならぬ。

「怒るな、く、然しおぬしも悪いじゃないか、平岡にも内證、瓢家へも内證、——それが悪いぞ」

公爵の言ひ分も尤もながら、然しお鯉の方にも理屈はある、却々負けては居ない。

「内證、内證、と、私が何か悪い事でもした様に仰やいます、いくら貴方が私を買切つて

おいでになつても、それは私事と云ふものです、私も商賣を廢めて了つた譯ではありません、私は藝妓が職業です、藝妓の方から云ふと、買切られて居ますなどは、公然威張つて云れない位のもので、商賣をして居る以上、呼ばれて行かれない事はない筈です、但し悪い事をして、貴方のお顔を汚すやうな事をしては不可に違ひありませんが、藝妓として定つた道を通るのに何が不可いのです。……

遮莫、平岡さんに言ても許されさうありませんから、黙つて行たのです、それが悪いと云ふなら、綺麗さつぱり廢めて頂きますやう」

「それじゃ約束が違ふじゃないか」

「違つても仕方がありません、藝妓には藝妓としての道があつて、お茶屋にも、お客にも、義理と云ふものがありますからね」

切り出したからには、今は一歩も引かぬといふ意氣込みで舌鋒するどく、桂公に喰つて掛る、だが寛容な桂公は、何時まで若い愛人と討論をして居ても際限ないと思はれてか、これも例のお鯉の氣質、言出したら、後へ引かぬ江戸ッ兒の氣性が面白いと思召したか、悠然にこやかな

顔になつて。

「やめる、やめないの問題じゃない、そんな事が無ければ、夫で善い〜、」

と笑つて済された、然しお鯉の腹の中は、却々、それで済されないものがあつた。

瓢家の経緯からお鯉は種々な考へが胸の中に湧き返つて、一夜中まんぢりともせずにもだへ明した。

「私は總理大臣の對手を張るなど云ふ様な、大それた事は致しません」

と、辯解するのも辛い様に、打しほれて居る川崎さんの姿が、彷彿として眼前に浮んで来る。

「平岡にも、瓢家にも黙つて田中家へ行たのは、悪いじゃあないか」

赤坂で仰せになつた御前さんのお言葉。

おゝ強者と弱者！

長い者に捲れる、とは誰が訓へたか……強い者の方へは、凡ゆる策を旋らして、馳せ参する者が澤山あつて、弱いものを陥れやうとする、人の自由を束縛し、ありもしない汚名さへ附けて、名譽や體面を蹂躪る、藝妓には節操などは無いものゝ様に云はれるのが腹立しい。

考へれば考へる程癪にさわる。

もつて生れた江戸ツ子氣性が、ムラ〜と燃へ上つて、矢も楯も堪らず、もうどうなつてもかまはないと、お鯉の胸は引きしまつた。

(104) 弱きを助くる棄身の戀

川崎芳太郎氏が溢す一滴の感涙

夜の明けるのを待ち兼ねて、お鯉は川崎さんの定宿、木挽町の岡本旅館を訪れた。今起きた許りの川崎さんは、餘り早朝の訪問に、何事かと訝かりながら、お鯉を其室に通した。

縷々言ふ必要もない、お鯉は手短かに今度の事の挨拶を述べてから、自分の決心を打ち明けた。

「私は覺悟して來ました、この上は貴方の御考へ次第です」

昂奮し切て居る顔容を見たゞけで、其覺悟の容易ならぬものである事を、川崎さんは見て取つた、然し川崎さんは相變らず柔和な物腰で徐かに口を切る。

「覺悟とは？ 如何いふ事なんです」

「私は餘りお氣の毒ですから、貴方のお顔を立てたいと存じます、今でも私はまだ藝妓なん

です、ですから貴方の御決心次第で如何にでもなります、總理大臣でも尋常のお客でも、藝妓としての私から見ても、何の違ひもありません」

若し貴方さへ其お心なら、私を如何か神戸へ連れて行て下さい、如何にでも思召の儘になりませう、壞かれて募るが戀のならばはしならば、戀ならぬ人の心も、理不盡な傍の仕向け一ツで、義理が眞情に乗り移らぬとはいひきれない。

ちつと聽き入つてゐた川崎さんは、お鯉の言葉の切れるのを待つて。

「イヤ誠に有難う、貴女の好意は川崎芳太郎生涯忘れません、大勢の中で飛んでもない恥をかゝされながら、私は我慢し通しました、今貴女のうれしい心意氣を聽いて、本當に感謝してゐますが、然しよく私のいふことを聽いて下さい」

お鯉は一語も聽き漏らすまいと懸命に固唾を呑む。

「私と貴女とは數年來、客として藝妓として親しい友達づき合ひをして來ました、神戸に歸ると家内にも話して聞かせ、家内も喜んで私の上京の都度、これはお鯉さんにと心を配り、貴女もまた奥さんに子供にと、何かと心附けてくれる、かうした間柄でしたね。友達と云ふ

ものはお互に、相手の幸福を考へなければなりません、貴女が私の事を思ふてくれるについで、私はなほのこと貴女の仕合せを考へねばなりません。こゝで私が貴女を連れて歸つたとしますね、私は養子の身の上です、貴女は生涯妾といふことになり、それも我慢してくれらるゝとして、私は仕事の關係上こんどの戦争で、總理大臣とはいろゝの交渉を有つたのです、貴女と私の關係が二人に如何いふ結果を與へるか、よくお判りでせう……どうぞ貴女も幸福に送られるやう、また川崎も男にして置いて下さい」

はふり落る涙の中に情理を盡くして語る川崎さん、當時三十八歳の分別盛り、事業の前には忍び難きを忍ぶ男の意氣が潜んでゐる。
上氣あがつてゐたお鯉は、一陣の涼風に眼界の雲霧を吹き拂はれ、カラリとした天地に蘇がへつた心持になつて、川崎さんの眞面目の面を仰ぎ見た。

その夜神戸に立つ豫定だつた川崎さんは、此のまゝ別れるのは心残りでもあり、田中家にも大分迷惑をさせたといふところから、田中家の女將とお鯉とを招んで小宴を張つた。

この女將は丸子時代から新橋村の泣き上戸で評判の人だけに、此の場合二人に對して、如何して泣かずに居られやう、全く手放しで泣きだした。

「ほんとに口惜しい、口惜しいつたら有りやしない、瓢家では、私の家を失敗らせるつもりなんだよ、それに皆が妬んでお鯉さんも失敗らせやうとするのさ、……かうなれば意地でも落籍すといふところなんだが、それも出来ないし……ほんたうに浮世だわねエ……」

口説ては泣き、泣いては口説く。

その後川崎さんは、上京してもお鯉を呼ぶことはなくなつた。しかし歸つてから、おひさ、と二人に屹度上布や大島の揃ひを贈り届けられた。

川崎氏から贈られた反物は、かくして永くお鯉の涙の種となつた。

(一〇五) 身受けの相談

——馬越ビール大盡の藝妓哲學

戦争の進行に連れて、総理大臣たる桂公が日夜の繁劇はいふまでもない。餘程重大な用事でなければ、永田町の官邸を離れることも出来ない。お鯉との會ふ瀬も間遠になる。先輩の山縣老公など大層心配されて、桂だつて人間である、稀には暢氣に面白く遊びでもしなければ、頭腦も身體も續くわけのものでない、左様いへばお鯉はどうした。相變らず藝妓をさせてあるのか——との仰せ。

かくと承つた例の平岡大盡、かやうな事は拙者の十八番、どうか私にお任せ下さいと、一議に及ばずお鯉落籍の役を買つて出た。

一日永田町の官邸に呼ばれたお鯉は、公爵から直接に身受けの相談を持ちかけられた。

「山縣が大變心配してくれる、自分はどうも忙しくて閑がない、もしお前の方で善かつたら、

平岡のいふやうにして置いてくれ」

初めこの身を公に捧げる決心をした時から、他日必ずこの事のあるのは思はぬでもなかつた。うち裏にはいろ／＼の事情もあるが、今は彼は申立てる場合でない。仲に立つて話を運ぶ平岡さんは、例の流儀であるから、どんな事をするか分らないが、總ては公爵の思召に従ひ、何事もいはずに仰せ通りにならうと、お鯉は覺悟をした。

然し大切な身の極りである、二三相談してみたい人がないでもない。

そこで先づ櫻川町さん——ビール王馬越恭平翁——に相談した。

翁はお鯉の話を聞かや、手を拍つて大喜び。

「それは目出度い、結構な事です、藝妓は二十五が止りです、惜しまれて引くのが藝妓の花です、どんな藝妓でも三十になれば下の下です」

馬大盡、專賣のげす口調を連發して、頻りに賛成される。

お鯉は此時恰度二十五である、大盡素より夫を知つての御議論にちがいない。

以前不思議な事からの因縁もあり、お鯉は有り難く馬越大盡の話しを承はつた。

それから間もなく、果して平岡氏から、お鯉の落籍に關して入用な金の額の相談があつた、對手は何と云ても時の總理大臣陸軍大將、此方は新橋に幾人と算へられる藝妓、譬ひ何程と吹掛けても、決して不當な相場のあるべきでない、然しお鯉としては何にも云ひたくない、只、二度目に新橋から現はれる時、近江屋から借り受けた金二千圓、年利六分の借金の外、別に算へ上げるべき金がないのである。

歸つて養母のお初に此話しをすると、之は頗る不機嫌で、大反對である。

「何々さんは何萬圓で落籍された、誰さんは如何して貰つた、某さんは斯した」と云ふ近い實例を數へ上げて。

「お前は如何いふ心算か知らないが、金も貰はずに落籍て了つて、後日はどうする考へだへ」藝妓をして居る以上、養母の云ふ處も至當のやうである、然し斯様に金の事を云はれると、お鯉の方にも大に理窟がある。

「母親さん、あなたは娘の身の極りを考へて呉れないのですか、いつまでも藝妓をして居るのは、決して良い事ではありません、それにお金が何うの斯うのと、お腹の中まで藝妓屋の

お母さんにならなくつても良いでしやう、私の身の極るのだから、安心して下さい」斯う話をすれば、養母も分つて呉れる、全くの處、心からお人好の江戸ッ子であつた。他に何にも拘泥することもないのである。

(二〇六) 荒岩が感慨多き想出

——笠仙の借金は其儘でお分れ

次には荒岩關である。お鯉がいよ／＼桂公のお世話になるについては、是非この荒岩の諒解を得て置かなければならぬ。恰もよし、地方巡業中だつた荒岩は、回向院の五月場所に歸つて来た。そこで早速この話を切り出した。

荒岩關は太い腕を組みながら、感慨深さうに耳を傾けてゐたが、

「俺は以前お前さんに、嫁になつてくれといつたことがある、あれは仔細あつてのことだ。お前さんが市村にゐた時分、いつぞや東京座で、大砲と俺と二人でお前さんに恥をかゝせたことがあつた。しかしあれは間違ひであつた。その後お前さんが藝妓に出て、常陸關との取組に賭けられた、其時俺は立派に男を立てさせて貰つたが、全く深い／＼因縁と云ふのだらう……」

荒岩の話は、こゝで一寸途絶したが、暫らくしてまた續ける。

「お前さんの性分では、若し譯の分らぬ人に掛つたら、生涯苦勞をしなければならぬ、何卒して安心させて上げたい、大阪へ連れて行かうと云ふのも、一生安穩に送らせたいたからだ、處がお前さんは斷つた、俺にも其心持が善く解る、全く無理もない、俺も藝人だ、姑もある事だし、若し間違へば市村のやうな失敗を繰り返させることにならう、だから俺も強てとはいはなかつた……ところで今度の事は至極結構だと思ふ、有象無象の手の届かぬ所へいつて澄ましてゐてくれる方が氣持がいゝ、いよ／＼左様なつたら一生懸命に勤めて上げてくれ」土俵の上の摩利支天は、世話人情の手捌きも善く心得て居る。

荒岩は話してゐる内に、不圖思ひ出したらしく、こんな餘談をつけ足した。

「桂さんには、俺もまるで因縁がないでもない、俺がまだ若いころお國の奥様——公の令妹——が人力車から墜ちなすつた時、偶然通り合せて助けて上げ、公爵のお邸までお送り申したこともある、そのお邸へ今度はお前さんが上がらうといふのだから、不思議さね」親身の兄の言葉を聞くやうな思ひで、聞き入つてゐたお鯉の前に、荒岩關は懷中から取り出

した一封の紙包みを置いた。

「それからお前さんは、金の事に淡泊過ぎる、それがまた値打でもあらうが……然し稼業柄借金もあるだらうし、失禮だがこれを何かの足しにしてくれ」
贈られた金は二千圓である、お鯉は外ならぬ荒岩の顔を立て、清く納めることにした。
さてこの金子を何に費はう？

これが生涯の別れだから、何かその記念になりさうな品もがなと思案の末、人の別れを意味するといひ慣らはしの鼈甲の櫛とそれに挿添への笄を造らせた、この代價さつと、二千圓。

さて其の次ぎにもう一人、これはまた商賣を離れての江戸前氣象、お鯉が藝妓をしてる間の、着類一切を引受けて、一流の藝妓としての服装に、恥づかしからぬやう心を配つてくれた吳服屋笠仙の英さん、この人にも今度の事を談して聞かせたり、今日迄の不拂金千四百圓からの言譯もせねばならぬ。一日家へ呼んで始終の話をした、英さん双手を舉げて大賛成である。
「それは本當によかつたね、高根の花で納まるさ。これでやつと俺も溜飲が下つたよ」

英さん此時まで、お鯉が市村羽左衛門の處から出て來た際の屈辱を忘れずに居たのである。借金の方の話をすると。

「どうせ左様いふ身分の人は、自分で何事も勝手に出来るのではあるまいから、貰ふ譯にも行くまい、私の處の借金なんか、少しも構はないよ、心配せずに氣持を善くして、みつともなく無い様に落籍がいよ」

有繋は昔時から名を賣た、江戸の大商人の若旦那、大きな肚である。
人の心は、皆それ／＼に、お鯉に取て嬉しいものであつた。

荒岩が、天晴れ男らしい人物である事を、お鯉は其後桂公に話した、公は荒岩の當初からの話を聞いて、非常に感心された。

「それは本當に面白い奴じや、俺も最負にして遣う」
それからと云ふもの、公は屢々酒宴の席へ荒岩を招かれた、荒岩も亦、公があれ丈の身分にも拘はらず、物に拘泥しない恬淡たる風格に恐れ入て、心から公を尊敬した。

荒岩は有名な美音で、何の唄でも善く謡う、三味線もかなり上手に弾いた、桂公も亦美音で唄が好で、興に乗ずれば随分よく謡つたもので、お對手の藝妓達に賞められたものである、左様いふ血統でもあるか、公の子供達も猶且皆善い聲を持って居られる。

第三師團長時代に、名古屋の「甚かぎ」と呼ばれた、甚句の上手な藝妓が居た、公は此「甚かぎ」から移された自慢の相模甚句を、よく興じては唄はれる。

今年や豊年だよ、田も畑も萬作だよ

爺様も婆様も、喜ばしやんせ。

傘の骨はバラバラ、紙や破れても

離れまいとの、千鳥がけ。

こんな文句の相模甚句を、新橋の藝妓達に教へて、唄はしたものである、それを荒岩にも移して、其美聲で朗々と謡ふのを喜んで聞かれた。

「サア如何じや、俺が巧いか、荒岩が巧いか、どうじや」

などと藝妓達の批判を求められた。或時は亦荒岩に對つて。

「俺が教へるばかりでは悪いな、お前は俺には兄貴に當る縁があるのじやから、何か一つ教へて呉れ」

と云はれて、荒岩を恐縮させた、終に荒岩が相模甚句の踊りを教へる事になつて、居合す藝妓達と共に、公が甚句の踊りの稽古を爲された事もある、處が眞物の相模甚句は、却々拍子が六ヶしいので、いつも甚句を踊つて居る藝妓達まで、手を拍く間がむつかしいのに、困つた事がある。

(一〇七) 巳代治伯を調伏の祕策

目黒の恵比須館へ藝妓の保養

お鯉の藝妓生活は程なく終つて、此に新たなる時代に入るのであるが、其藝妓をして居た中の想ひ出話しの、奇抜な處を一つ、此に紹介する。

今でも御機嫌でお居でなさる伊東巳代治伯爵、一時は飛ぶ鳥も落とす大した勢威で居られたので、お鯉もよく御目に掛つた、然し夫は毎も他の御招待のお席で、巳代治さん自身でお遊びになると云ふ様な事は、餘り無かつた。

尤も赤坂に鹿の子があり、永田町の御邸内には、髪結びやうから着物、帯、凡てを同じやうに揃へた幾人かのお妾が居た、其れで外のお遊びが少なかつたのかも知れない。

『伊東の御前さんは、お招待にはお出掛けになるが、御自分で皆を招んでお遊びになる事なぞ無いんだから、本當に憎らしいよ』

口さがない女共は、兎角にべちやくちややりたがる。

何とかして、伊東さんの御馳走にならうではないか、との相談が、悪戯好きな藝妓達の間に一決して、何か好い智慧はないものかと、郵船の加藤正義氏に相談した。

人の悪い加藤氏、即座に好い分別を考へ出して呉れる。

『そんなに皆が口惜しがらるなら、丁度好い事がある、四五日経つと、馬越さんのエビス、ピールの大冷蔵庫が出来上るので、一同を招待する事になつて居る、伊東も呼ばれて行くのだから、何とか、あの近所で一趣向しては如何だ』

それは巧い事が發見つたと、種々と評議の結果、馬越さんの催しの二三日前に、伊東さんの鹿の子を連れ出して、目黒の恵比須館——其頃あつた温泉旅館——に陣取つたのは、喜代次、清香、お鯉の三人である。

その趣向と云ふのは、出来るだけ贅澤をして、一同で遊んで。

『さて伊東さん、鹿の子さんも商賣が忙しいので、少うし身體の養生をしたいとの事ですから、我々もお伴をして養生をさせて頂きました、誠に有難う御座いました』

無理に有難がつて、恵比須館の勘定を拂はせやうと云ふのである。
當時は未だ一向に開けない東京の郊外目黒の竹藪の間、寂しい田舎式の旅館へ、二三日間のお籠りは並大抵なことではない、只すらに伊東已代治さんをびつくりさして上げたいと云ふ謀計の爲の辛棒である。

(二〇八) 取巻が主人を追使ふ

——清香の偽紫式部怒り出す事

喜代次、清香、お鯉の三人は、云ば取巻に出掛けたのであるから、相當鹿の子に勤めなければならぬのであるのに、一向左様でない、第一清香は偽紫式部の名の附て居る位の容體家で、大いに納り返つて居る、お鯉は亦評判の我儘者で贅澤家、田舎の宿屋の物などは、兎ても口へ入らないと一つ一つ文句が出る、這樣ものは喰べられないから、東京の何所へ行って、何を取ってもらはう、あれを取寄せたいと云ふ注文、大姐さんの喜代次まで。

『ほんとに左様だよ』

と、坐るに年長者の權威を示して、泰然たるものである、最も此趣向の目的から考へれば、斯した贅澤をするのも當然の事でもあらうが。

其晩は、此企劃の參謀長たる加藤正義さんが、近藤廉平氏と共に、瓢家の女將を連れて御來

臨だ。

「衆妓がどんな顔をして納まつて居るか、見に来たよ」

そら御珍客とばかり、一同はしやぎ立て、賑かに騒いだ、甚夜はそんな事で、つい氣も附かなかつたが、翌日になると、大變な事を發見した。

何にしても御主人格であるべき鹿の子は、赤坂の春本で、最初の娘分である、所謂春本仕込の、多藝にして多能、出来ないものは一つも無いと云ふ豪妓、禮儀作法の心得も充分にある、其上生得剛發の生れで、何から何まで善く氣がつく、お鯉より一つの年長であるに拘らず、常に清香姐さん、お鯉姐さんと呼ぶ如才なさ。

お酒が始まると、お酌をして居る。

御飯になると、何時の間にかお給仕をして居る。

お風呂に入ると、背方に廻つて、流しましやうと來る。

朝は、含嗽、手水の水まで取つて呉れて、

「ハイ、お石鹸は此處に置きました」

昨宵瓢家の女將が持て來て呉れた越後屋の水羊羹を思ひ出した、お鯉は紫式部が御持參の仕込のお挽茶が飲みたいと云ひ出した、鹿の子は

「私がお點てしましやう」

と云ふ、さても其のお手前の鮮麗さ。

清香は自慢の大前髪をかき上げて席に附く、次いで喜代次、お鯉も居並んで、お菓子を頂いてはお挽茶を飲む。

「結構ですね、もう一服頂戴します」

「私も、もう一服」

といふ調子で各自二三服づつ飲む有様、御亭主役の鹿の子、骨の折れること一通りで無く。彼是する内、やう／＼氣が附いた清香とお鯉。

「ちよいと、戯談じやないよ、鹿の子さんは御主人じやないの、種々の事は、取巻の私達がして上なければならんだよ」

「あら、左様だつたわね」

やつと兩妓が氣が附いて、少し改めやうと思ひ合て居るが、根が暢氣のお揃ひときて居るので、何か用をする事があると、此方で少しも氣の附かない間に、鹿の子は夙に氣が廻つて、さつと行つて了ふ、いつでも後でおやくと云ふ始末、食事の時には、まづ坐蒲團から敷き直して。

「さあ清香姐さん此方へ、お鯉姐さん此方へ」

とやられて、つひ濟ませんね、と坐り込む。其内喜代次姐さん有繫に歳の故か。

「ぐずぐず遊んでると却つて肩が張るわね、按摩を頼んで貰はうかね」

鹿の子は直ぐ立つて。

「御氣には入りますまいが、私に揉まして頂きませう」

朝は誰よりも、鹿の子が一番早いのは申す迄もないが、一同が脱ぎ棄てた着物は、夜の内にすつかり疊まれて、朝着替るのに都合の好い様に始末がしてある。

あんまりの事に、清香がまづ怒り出した。

「私は、寧ろ腹が立つよ、なんぼなんでも餘り氣が付き過ぎるわ、少しは御主人らしく我儘の

一つも云たら善じやないの、箱屋じやあるまいし、お湯まで酌んで呉れなくつてもさ」

「全くだわね」

二人揃つて、年長者の喜代次に此の事を訴へる。

「ねえ、姐さん、あんまりじやありませんか、如何思ひます」

二妓が眞面目な顔して怒つてる態度に、喜代次も聊か面喰つた、然し此方がぼんやりして居て、氣の利いてる人を怒りつけるのもおかしい。

「ほんとに、困るね——」

全く困つたものである。

(二〇九) 一代の才人も藝妓に敵はぬ

——途々背負された惠比須館の散財

困るね——の喜代次を捉まへて、清香とお鯉の二妓が、愚圖々々云つて居る處へ、當の本人の鹿の子が入つて来た、伶俐な人であるから、直ぐ其座の様子を見て、慥にこれは面倒など、感附たが、直ぐ外す譯にも行かないので、もぢくして居る、餘憤尙ほ收まらざる二妓は、倏忽鹿の子に對つて、穩かならぬものを浴せる。

「鹿の子さん、少しは考へて頂戴な、私達は之でも取巻に来てるんですよ、貴方も少しは御主人らしく、我儘してくれても善じやあないの」
鹿の子は例の調子。

「何とも相濟ません」
と謝つて居る、誠に何にもならぬ人である、大姐さんの喜代次は、此の場合黙つても居られ

ない。

「清ちやんとお鯉ちやんの云ふのも、至當の様な理屈だけれど、そんなに怒らなくつても善わね、兎てもあなた達を取巻に出来る藝妓は、廣い世界に無いんだからね、ねえ、鹿の子ちゃん、可愛想に、這様な人達を取巻にして歩いてたら、世話ばかり焼けてしやうがないわね」
程よく仲裁して呉れて、兩方謝罪つて、果は笑つて、有耶無耶に納まる、喜代次は何時も斯した調子で、少しも動かぬ人である、これがまた此人の衆妓に立てられる所以で、新橋村に無くてならない大姐さんである。

愈々馬越大盡の園遊會の當日が来た、大勢集つた當代お歴々の並居る中から、加藤正義氏は己代治さんを捉まへて。

「喜代次、清香、お鯉の連中が、鹿の子と一緒に惠比須館に来て居るから、行て見やう」
己代治さんには、何の事か解らない。

「それは一體、どうした譯だ」
と、變な顔をして御座る、一代の才人も斯した調伏に逢ふのは、珍らしいと見へる。加藤氏は

は説明して云ふ。

「馬越さんのお約束の日まで、静養旁々来て、待て居たのださうだ、兎に角一同で行きましやう、馬越さんの處へ」

加藤氏はあつさり片附けて、巳代治さんと共に四人を引連れて馬越邸へと引揚げた。
喜代次は馬越さんの顔を見ると、堪へ切れなくなつて清香とお鯉が鹿の子に怒つた顛末を話した、馬越さん始め居合す面々。

「鹿の子は惻怛者で評判な妓だ、人もあらうに容體でだらしの無い二妓が取巻では、とても助からない、どうせそんな結局になるだらう、然し面白い話だね」
一同腹を抱へて大笑ひになる。

が、そんな事で手間を取ては、肝腎の目的を逸して了ふ、早く此度の結末をつけねばならぬ。
「巳代治さん、本當に有難う御座いました、お蔭で私達まで、平素の疲勞が休まりました、有難う御座いました」

何でもかんでも、滅茶苦茶に有難うを連發して、巳代治さんを煙に捲いて了はうとする、迅くも此の魂膽を勘ぐつたか。

「そんな事は知らぬよ」と、突惚け出す巳代治伯。

「いゝえ、有難う御座いました、澤山御禮を申上ます、わあつ」
と云ふ騒ぎ、仕舞には彌次馬まで加はつて、巳代治伯を祭り上げるので、終にはそんなことは知らぬよ、では通らなくなつて、辛くも目的を達したとは手柄であつた。
その、惻怛で温順な鹿の子は、今は某博士の正夫人になつて居る。

(一一〇) 血腥い記念物

——焼打に會つたお鯉の妾宅

お鯉は愈々、新橋の金春新道から神燈を引込める事になつた、舊の主人の近江家から用達つて貰つた二千圓の借金は、平岡氏の手で、返済された、が笠仙の英さんからの着物の借金は返す事は出来なかつた、所謂借金附で落籍た譯である。

あれ丈に賣た名前である、その儘に消して了ふのは惜しい、誰か相當の妓に襲がしたら、と云ふ事になつて、其候補者には自然、お鯉の家の抱妓のおこうと云ふのが選ばれて、二代目お鯉となつた。

おこうは俳優の坂東富十郎の娘で、以前日本橋から雜妓に出て居たのを、世話をする人があつてお鯉の家へ來たのである、却々伶俐な妓であつたが、年齢も若く、姐さんのお鯉が餘り全盛で、光り過ぎて居た爲め、まだ大して認められるに至らなかつた、然し將來は必ず相當の妓

になるであらうと、即ちお鯉の咎を襲がせる事にしたのである。

二代目お鯉になつてから忽ち大物になつて、其後西園寺さんが首相になられた時、總理大臣には附き物ゆへお鯉を呼べと仰せがあつてお世話になつてゐた。今は六代目の弟、と云ふよりも、時の宣傳に無くてならぬ有志家坂東彦三郎の家内になつて、數ある俳優の女房中での利發女と云はれて居る、猶且お鯉と云ふ名は、縁起が善いものと見える。

當時桂公は、永田町の首相官邸に住つて居られた、お鯉の家も、官舎から餘り遠く離れて居ない方がと云ふので、既に桂家で買つて置いた赤坂榎坂町の家に住ふ事になつた。

お鯉は若い時から道具好き骨董好きで、見當り次第何でも買込むので、よく養母から、家が狭くて置き切れはしないよと叱られた、乃で魚河岸の三河屋の娘が嫁に行て居る上田省吾と云ふ人が、山下町に土藏附の家に住んで居たのに頼んで、其藏へ預つて貰つた、買つては入れ、買つては入れて置いた道具が、驚く程澤山あつた。

其荷物を榎坂の新宅へ運び込むと、十分に間に合ふ、家に附いた道具と云ふものは全然ないので、凡ての品は悉皆お鯉が取つて置の品物許りで用がたりた。

此妾宅にはよく伊藤公、井上侯、西園寺公などのお歴々が見えた、すると桂公は手廻りの道具を指しては

「之もお鯉の持参金じゃ、之も、之も」

と説明する、お客は呆れて。

『大層持参金のあるお嫁さんじゃのう』

と大笑ひをするのも毎度の事であつた。

其家は公の歿後、同郷山口縣出身の前貴族院議員道源權治氏が買取つて、今でも別荘にして居る。

お歌所の歌人阪正臣氏の隣家で、見るからに餘り綺麗な邸宅でもない、然しお鯉が此に居た時には、御主人たる桂首相は無論、時の元老、大臣、將軍、大實業家、大富豪等が、入れ替り立ち替り出入して、近所の人の目を聳てしめたものである。

後日日露媾和の條件が、國民の氣に入らぬと云ふので、例の燒打事件が始まり、帝都が無警察の状態になつた時には。

「此が桂の妾の宅だ、唄き壞して了へ」

と群衆が襲撃を加へたのも此家、お鯉が死を決して、短刀を懷中に、暴徒の亂入を待ち構へたのも此家、門外からの一齊射撃で、門扉には今でも數個の彈痕が残つて居る筈、遂に町内の人から立退を強請されて、止むなく久留米緋にメリンスの帯、手拭に顔を包んで深夜無風流極まる落人をきめたのも此家からである。

貧弱なる榎坂の一小邸は、只にお鯉の一生の想出の種ばかりではない、また我が大正初頭の歴史に、血膾い一頁を色彩つた記念物といへやう。

(一一一) 斯道にも大元老の春畝公

——鼻唄の都々逸で藝妓を調謔ふ

榎坂のお鯉の宅へ、來られた人は澤山あるが、最も華美で、陽氣で、異彩を放つて居たのは、やはり伊藤博文公であつた。

その人物、經歷、嗜好から、そのお客振、遊び振、お話し振、取巻の顔觸などが、何れも他と大に違つて居て、やつぱりお豪い方と、誰が目にも見えた。

主人の公爵が、永田町の官舎から歩いてブラ／＼來られる、すると其影を逐ふやうに、伊藤公が來られる、そして何かしら密談が交はされる、それが御用で來られたのだから、遊びに來られたのだから、傍からは少しも分らない、伊藤公にはまた獨得の面白い流儀がある。

新橋の若い藝妓の二三人から、お鯉の處に電話が掛る。

「昨晚、伊藤の御前さんにお座敷でお目に掛りましたら、明日あなたのところへ行くから、おぬし達も來いよ、と仰いました、伺つても宜しう御座いますか」

伊藤さんからは何の御沙汰も無くて、突然斯した電話がかかる、桂公が來て居られる時には、此事をお鯉から申上げる。

「また大勢でやつて來られるのだらう、此の家は繁昌で善いね、お茶屋なら儲かるだらう」と笑つて居られる。

翌日は早くから仕度をして御客の御出を待つ、聽てやつて來られる伊藤公には、毎でも取巻が大勢である、赤坂の鹿の子、はる子、萬龍、林家からは林子、三助、それから其時代琵琶藝妓で聞えたはま子、此はま子が今長唄研精會の頭領吉住小三郎の案内になつて居る。

伊藤公はよく此の林家へ行かれた、林家が春本と同格の藝妓家になつたのには、伊藤公の御最負にも原因する、同家には公の碁の御相手までする藝妓が居た。

斯んな藝妓達に交つて、始終連れ歩かれた女の中に、薬研堀の名古屋料理の大又の娘姉妹が居た、この姉妹は公の朝鮮行までお供をした御氣に入りである。

此の大連を引連れて、お鯉の處へ來られる、桂公とお鯉が玄關に出迎へると、老公は態と意

外なお顔。

「此の家へ約束をして来た譯でもないのに、どうしたのだ」
主人の公は莞爾として答へる。

「そんな香がしたからね」

「前以てお申込の無いお客様ですから、行届きませんが、まづ御通り下さい」
とお鯉が取り倣す、老公透さす。

「いや、前以て申し込むと、桂と云ふ亭主が出るだらうと思つてね、それが氣に入らんからな」

女關先から直ぐ戯謔である、それから座敷へ通る迄に、女中共にまで一人々々調謔ふので、何れも恐れ入つて逃げ出してしまふ、坐に就かれると直ぐ。

「さて、お風呂は沸て居るかへ」

何處へ行ても同じ事、何時でも瓢家邊りに居られる御氣分であられるのは、他人の眞似る事の出来ぬところである。

伊藤公は酒豪である、餘り過度に飲まれるので、始終醫師から止められて、葡萄酒を代りに用ゐる、それも忽ちに二本位片づけて、微醺を帯ばれる頃になると、必ず。

「白い方にして呉れ」

と、日本酒をねだられるのが定りである。

仰る事が、何所までが眞實で、何所からが戯言か、少しも判らぬ、藝妓との會話は、殆んど皆當意即妙、出放題の都々逸である、即席急造の珍文句、舊作か、新製か、悪口の都々逸は澤山御承知で、代る／＼公の鼻唄になつて溢れ出る。

「藝妓の親切、縁日の植木、

水を遣らなきや枯れたがる」

この都々逸などは、伊藤公を知る程の藝妓は、悉く聞かされて居る、何度も／＼、お目に掛る度に之を繰返へされるので、何れも憤慨して、抗議を申し出た事などもある。

お氣に入た藝妓があつて、他の妓は早く歸つて貰ひ度い時などは、やはり例の都々逸で。

「ほんにお前は野暮な人」

などと連發されるので、あらさう、それは濟みませんでしたね、と、早々と引下る事にして居た。

(一一五) 伊藤公に藝妓から悋氣

梅子夫人のお豪さ加減

伊藤博文公の藝妓譚、それは餘り數が多過ぎて、珍談奇話の連続であるから、敢て改めて紹介するにも及ばぬ、只餘り多く人の知らぬ風變りの逸話を此に記して、聊か此偉人の半面を偲ぶ緣由とする。

公が大阪から連れて來た舞妓上りの妓に、文香と云ふのがあつた、舞妓の時代に、公が一寸世話をした事から、有名になつて、終に公の名の一字を冠つて、文香と改名して全盛を極めた、それが十七の時に公が東京へ連れられて、大磯の滄浪閣の、賢夫人の名の高い梅子夫人の許に置かれた。

處が、此文香、お國柄ででもあるか、却々の堅實女で、まだ十七八の小女の癖に大の嫉妬家である、公は關係した女を片端から忘れて了ふほどの達觀振であるから、大磯へ置いた文香の

事などは、殆ど氣にも留めず、例の通り東京で發展して居られるので、文香は身の程も忘れて、悋氣を焼き、人もあらうに梅子夫人に對して、夜晝口説き立てるので、神様の様な夫人も持て餘して、夫なら自身東京へ行って申上げたらず善からうと、人を附けて公の官舎へ送り込まれた。公も仕方がないから官舎の一室に置き、時々お茶屋等へ連れて歩かれたが、時にはお邪魔になる事があるので、夜も更けて大抵の家では戸を締めて寢沈まる頃、榎坂のお鯉の門を叩き起して。

『おぬしの處へ、今晚文香を宿めて置いて呉れ』

と預けて行かれる。お鯉はお守をする氣になつて、夜中枕を並べて文香と寢まうとすると、その愛らしい柔しい妓の口から、京都辯の粘り強い口調で、老公に對する恨み辛みの有ん限りを並べる、之にはお鯉も少からず惱まされた、それも度々の事なので、成程後世畏るべしとは、這樣事を云ふのだらうと、呆れた。

伊藤公は、そんな事は氣にも留めない、戲言半分に御耳に入れても、只「フーン」と笑つて居られる。

左様かと思ふと、伊藤公にはまた人の氣の附かぬ面白い癖があつた、それは公が一寸關係した藝妓に、殊更贅澤な服装をさせて、一人竊かに北叟笑んで居る事である。或時は、公の定紋の下り藤を首ぬきに、大きく肩から染め抜いた縮緬のゆかたを着せて、一人悦に入つて居られた事などもある。

公が其身分に似ず、お金の無い事は誰も知つて居る、御最負を受ける藝妓達も皆それを知つて居るので、御前さんも却々氣前がいゝのねエ、などと嬉しがつて居たものである。

恬淡洒脱、君國の事の外は、萬事に超越して、藝妓などは只一時の玩具ぐらゐにしか思つて居られない伊藤公其人にして、猶且つ斯様幼稚い道樂氣がある、公もやつぱり人間であつた。

前の文香の事から想ひ出されるのは、公爵夫人の事である、夫人が稀な賢夫人である事は、世間で知らぬ者もない、公が内外公私の事に盛んに活躍して、殆ど家を顧みられないので、夫人は獨り大磯の別荘に籠居して、朝夕只盆栽いぢりに其日を送つて居られた事は、知る者の皆同情した事である、其間種々の逸話も傳へられるが、お鯉も亦親しく夫人の豪さ加減を知て、常に敬服して置かない。

例の文香を夫人の許に預け放しにする程の公である、常に色々な女を連れて大磯へ行かれる、其取巻やらお伴やらで、一流處の藝妓や、お茶屋の女將等が盛んに滄浪閣に押掛ける、遅くなるよと一夜のお宿を願ふ。

他の家へ泊つて、女の一番困るのは朝である、殊に花柳界の人間であるから、お化粧やら身の廻り萬端、他所ではどうも思ふ様に行かない、然るに梅子夫人は、實に恐れ入つたもので、凡ての物を女中に申しつけて揃へさせ、何一つ不自由をさせない、不足を感じる事は毫しもない、一事が萬事、始終總ての事に氣を注いで、何人をも理解し、何人にも同情し、常に心から優しく温かく待遇はれるので、お鯉の如きは、大磯へ出てお世話になる度に、毎でも涙ぐましい感激に打たれて、誠に尊とい有難いお方と思はぬ事は無かつたと云ふ。

(一一三) 腕捲りて春畝公を回す藝妓

馬車へ陪乗の香水賣

新橋藝妓で、梅勇と云ふのがあつた、何かの場合に、一度伊藤公の枕席に侍するの光榮を荷つた事がある、最も伊藤公に於ては、こんな事は少しも不思議ではないので、行き當りばつたり對手選ばずの流儀であるから、別に珍しい問題でもなく、其場限りと云ふ事に解決されて行くのである。

然るに此梅勇ばかりは、御定法通りに參らない豪物であつたから、面白い話しが始まる。

瓢家の廣間に、床間を背負つて坐られた大勳位公伊藤の御前、其左右には數多の元勳、大臣等がズラリと居並ぶのを物の數ともせず、一藝妓梅勇が、女だてらの腕まくり、眼を据ゑて、公爵の前に詰め寄つた。

「伊藤の御前さん、随分酷いじやありませんか、貴方は天下の伊藤さんでしやう、男の見本

になる様な貴方が、女を欺して、玩弄にすると云ふ法がありますか、貴方はお前を好きだと仰つたでしやう、どこがお好であゝなつて、今度は何所が嫌ひでお逃になるんです、卑怯じやありませんか」

並る客も、藝妓も、顔を見合せる、公はと見ると、例の流儀の都々逸か何かで、胡魔化して了はうとされるが、根が斯した事を人の前で、どしどし云ふ事の出来る藝妓である、却々もつて都々逸位で胡魔化されない、飽まで公に攻め掛るので、有繋の公爵も太刀打が出来ず、甚く狼狽された可笑しさ氣の毒さ。

此の一場面があつてから、梅勇の名は倏忽に擧つた、世間には人の悪い連中が居て、公の來られる席には、面白がつて梅勇が呼ばれる、すると豫定の行動とあつて、公を見掛けると必ず梅勇の腕捲りが姑まる、それは見物だ、と云ふので、皆が楽しみにする位ゐ、困るのは公爵ばかり。

「また今夜も、彼が来て居るね」と苦い顔をされる、一同の藝妓達は面白がつて。

「御前さん、あれとは何です」
判り切た事を強て尋ねる。

「あれとは彼妓さ、俺の苦手が居ると云ふ事じや」
「まあ面白いわ、御前さんにも苦手があるんですか」

何時でも口の悪い公に、凹まされて居る藝妓達は、之を見て大に痛快がつたものである。此の梅勇、こんな事が原因でめきめきと賣り出し、終に相當な顔の藝妓になつたと聞いたが、其當時は、私し達の朋輩にも豪傑が居るね、と評判したものである。

現今築地の待合とんぼの女將は、大した全盛を極めて居る。

この女將の佐川琴子さんは以前吉原の藝妓であつた、後に新橋から出たが、偶々對手に某田舎大盡が出来て、銀座の西側へ小さな香水屋の店を出した。

藝妓上りの香水屋は、香水を靴に詰めて賣り歩いた、が、有繋に大膽なものである、或る日の事、靈南坂の伊藤公の官舎に押掛けた。例の伊藤公の事であるから。

「ナニ、女の香水賣が来た、そりや面白いな、まあ上げて遣れよ」
何物にも拘泥しない公爵、對手が女なら話しは速い、女が豪ければ直ぐ其廣い懷中に絶る。
以前が以前だけ、心得たものである。

「御前さん、私は香水屋なんですよ、どうか香水の賣れる様にして下さい」
「よろしい、それでは私と一緒に来るがよい」

それから公の行先へ附随して行く、斯した因縁が元で、公が馬車で何所かへお出掛けになる
都度、香水入の鞆を下げた女が、公の馬車に陪乗して、方々のお茶屋や、宴會の席上へ現はれ
る様になつた。

あれ丈の人だけあつて、伊藤公は口こそ悪いが、一方非常に人に親切な方である、自分に使
つて来る者は、大抵の者は棄てない、必ず相當に便利を與へて遣る、とんぼの女將の香水屋も、
即ち公の此の性質に絶り附いて、巧く當てたのである。

香水屋を連れて宴會へ行く、其席には必ず藝妓と云ふものが居る、すると、公は第一に香水
賣の宣傳を始められる。

「俺は香水屋になつたんだよ、おぬし達、この香水を買って遣れよ」

乃で香水入の鞆が出る、兎に角御前様のお聲掛りである、義理にも一體位は買はなければな
らない、而して一通り商賣が済むと、件の香水屋は、席上で公の帽子を冠り、ステッキを打ち
振りながら。

「諸君よ、……」

などと、譯の分らない演説を始める、一同屹驚して、お愛想に手を叩く。
是も一度は愛嬌で好いが、二度三度と續くと、誰も彼も顔を擧める、不平がぶつくと起る。

「此頃、伊藤の御前さんは妙な香水屋さんを連れて歩いてるが、はじめは義理で仕方がない

けれど、困るわね』

藝妓の被害者が、漸々口説き立て、姦しくなる、果は公爵に對つて、直接談判を始める。

『御前さんも随分ですな、一度や二度は洒落にもなりませうが、さうく、のべつに香水ばかり買って居られませんからね』

すると、公爵も珍らしく悄氣た顔を御見せになる。

『うん、俺も困るんだよ、此頃ではこつそり出掛やうと思ふと、先駈をして俺の馬車に乗込んで居たり、途中で馬車の前に立ち塞がつて、乗り込んだりするんだからね』

成程、藝妓達が惱まされる頃には、公の方でも弱らされて居たのであるが、それも僅かの間で、何時しか公の馬車から香水屋の影が消えて了つた。

どうせ一人の女に、永續きのする公ではないと知て居ながら、面白半分藝妓達が伺ひを立てて見る。

『御前さん、近頃香水屋さんが見えませんが、どう爲さいました』

『うむ、香水屋かへ、もう香氣が消えて了つたよ、どうせ安香水だからな』

例もの調子で洒落のめして、香水賣の女の事は一時忘れられて了つた。

これが何時の間にか「とんぼ」を出して、遂に今日に至つた、豪い度胸の人は、やはり何所までも豪いものと、お鯉は其時の事を想つて、感心して居る。

(一一四) 名物「桂鯉」の茶碗

——水神の八百松に雅客の團樂

日露の戦争も、終局に近い頃であつた。

「桂の顔色が、見る度毎に悪くなる、何とか元氣を出させる様に、慰安して遣り度う」
斯した相談が、山縣公、井上侯の間に起つて、一會を向島は水神の八百松で催ふ事になつた、亭主役に指名されたのが大阪の藤田傳三郎氏、陪賓には野村靖、杉孫七郎、下條正雄のお歴々、お取持の女將は例に依り瓢家、田中家等、藝妓は新橋から喜代次、幸吉、松壽、おさと、清香等、それに柳橋の金八、日本橋の小花も来てゐた、桂公と井上侯とが當日のお正客である。

其日は朝から書畫を持寄つて、靜かに鑑賞する、そして首相の頭腦を休めると云ふのが、集會の越意であるが、やはり是等の人々が打寄れば、必ず何事か難しい相談をして居る、大抵なものではない。

藝妓達は、左様した時間を利用して、恰度好いから此間に百花園へ散歩にでも行かうと出掛ける、すると誰とはなしに。

「今日はね、藤田さんと云ふお茶人が御主人役の事だから、後では屹度お茶が始まるに違ひないわ、大分皆さん方も御家の珍寶を御持參らしいからね」

お茶の道に掛けては、お鯉も、藝妓達も、相當腕に覺えのある連中。

「それでは、私達も何か一趣向しやうじやないの」

互に首肯き合つて、密かに計畫した。松壽とお鯉とは、百花園の樂燒の前に立て、あれかこれかと、形體よく焼かれた茶碗を見出すべく努めた、やつとの事で探し當てた面白い恰好の茶碗、價金三十錢也、を大切に抱へて、歸つて八百松の帳場へ行きおかみさんに、掛合が始まる。

八百松の主人は心得たもの、早速土藏から持ち出した古箱に、件の茶碗をぼろ／＼の蝦夷錦の布で包んで納め、古い眞田の紐で丁寧に結ぶ。いはゞ金時繪の重箱に焼芋といふ體裁である。

お歴々の六ヶしい談合も濟み、書畫の鑑賞にも倦んだ、その一と休みにお茶の席が開かれる。女將連が持參の越後屋のお菓子に、井上侯が自慢の南京染附の菓子鉢が出る、さてお茶一服の

段取りとなる。

こちらはお鯉、色々の名器が出されてからでは面白くない、第一番に三十銭の樂焼で、一同をアツといはせたいのである。

席には既に藤田氏、井上侯、杉子の家寶が順々に持ち出されて、それ〴〵御自慢が始まらうとしてゐる、機會を覗つてゐるお鯉の方では氣が氣でない。

すると、そんな事に一向無頓着の桂公は、千松もどきに、いきなりそこへ出したばかりのお菓子を摘まれた。それからそお茶を上げなければならぬ。

「それお菓子を召上つた、直ぐお茶を差上げるやう」

いはれるころには、お鯉はすでに樂焼の茶碗にお茶を點てゝゐた、松壽が直ぐそれを運んで桂公に差上げる、公は何の仔細もなく、がぶりとそれを飲み乾される。

これが餘人ならば、さてこのお茶碗はと、道具の鑑賞に入るのであるが、桂公の事だからその邊一向お構ひなし。隣席の井上侯そこを早くも見てとつて。

「やあ、そのお茶碗は……」

不思議な品よと、眼鏡をお掛けになる。そこで松壽が早速の機轉をきかす。

「このお茶碗は、お鯉が桂の御前さんに差上げたいと、態々持参した品です、箱も添へてあります」

「これは恐れ入つた、特別に上げやうといふ譯か」

さすがの井上老侯も煙に捲かれた形ち。何か分らず感心される。その後は方々御持参のお道具で清香が自慢のお手前を見せる。

「さて一番劈頭の茶碗を拜見」

とあつて松壽は恭々しく持出した不思議の寶物、引繰返して見ると、底には「三〇」といふ値段書の墨色が、まさ〴〵と讀まれる、一同、開た口が塞がらない。

即ち百花園で「金三十銭也」の次第を白狀に及ぶ、藤田氏はさすがにお茶人である。

「これは御趣向、いやおそれ入りました」

と額をたゞく。この茶碗は以來「桂鯉」といふ銘を附けられ、杉子爵が得意の妙筆で箱書きをされる、藤田男が花押をする、箱の蓋裏には、下條正雄氏が記録を書く、野村子爵がまた添

書きをして、三十錢也の樂焼の茶碗が、一躍して天下の名器となつてしまつた。

桂公歿後、お鯉の閑居である大井町の家茶席開きに、近藤廉平氏、加藤正義氏、室田義文氏、岩原謙三氏、杉山茂丸氏の諸氏を招いた年の暮れの名残りの茶の時である、床には三條公の「うづみ火」の短冊が掛けられた。その短冊と共に評判になつて席に持ち出された「桂鯉」の茶碗は、一座の談話の中心となつた。

(一一五) 深夜に門を敲く

——すまじきものは宮仕へ

お鯉が、首相官邸に近い榎坂の家に移つてからも、桂公は滅多にお出にならぬ、稀にお出になつても大勢のお客に押し掛けられる。手狭で手ずくなの家で、そのお客を一々鄭重に持てなし、膳部のことまで氣を配るのだから、お鯉は忙しかつた。

主人の公爵は勿論何一つ指圖しない、自體氣も附かない性質である。そこで萬事お鯉の一存でやつて行く。それに要する費用も全部お鯉の方で取計らつてゆくのだから、表面は暢氣なお部屋様の様に見えても、内部はなか／＼樂ではなかつた。

幸ひにして戦争は至る所連戦連捷で、萬歳々々、の聲は國中に溢れてゐたが、極々の内裏へ廻れば随分と心配のこともあつたらしい。

總理の重い責任を背負つて、この時局に當る桂公の苦心慘愴は並大抵でなかつた。

餘り精神を過勞ぎる爲か、公の健康は日に衰へて、消化は不良となり、食事はそのまま嘔すやうになつた。主治醫である赤十字社の平井軍醫正は、もしかすると胃癌ではあるまいかと案じた。しかし當の公爵は少しも驚かなかつた。尤も驚いてゐる暇もないくらい國事は多端であつた。かく大患を申し渡されてもなほ平然として、毎日同じ様に劇務に當つてゐる公の容子を見て、公爵は屹度死ぬ方が樂で宜いぐらゐに、考へてゐるのではあるまいか、とお鯉は痛ましくさえおもつた。その間公の正室かな子夫人は、殆んど官邸に居ることはなかつた。いつも病氣保養の爲に伊香保邊へ行きりであつた。勢ひ官邸住居の公の身邊は、悉く女中任せで、公の不自由は一通りでない、いつそお鯉を官邸に置いて、お世話をさせるがよからうといふことになつて、お鯉は榎坂の家から官邸へ移つた。それでも、時々榎坂の家へ歸つたりしてゐた。

戦争も漸く終局に近づいた明治三十八年の八月のこと、靈南坂の伊藤公官邸に大官連が額を集めて密議を凝したことが、都合三度あつた。

或る夜の十時過ぎ、樫公は戰身裝いで榎坂のお鯉の家に來られた、珍らしく氣分の悪いやうな顔色で、初めて見る位の不機嫌な御様子、之れは只事ではない——お鯉はさう思つて公の氣分を亂さぬ様靜かに待遇をしてゐると、公は徐ろにお鯉を顧みて

『今まで伊藤公の官邸に居た、食事は欲しくない、一寸調べものをするから』

斯う仰しやる。二階八疊の座敷である、白麻の蚊帳を吊つて、机をその中に持ち込み、公は携帶の袱紗包から書類を出して机上に置き、それから眼鏡をかけられる。お鯉は公がお好きの番茶を淹れて差上げたが、無言で一口飲まれたぎり。お鯉は背後から靜かに團扇の風を送りながら、公が時々書類から目を外らしては、じつと考へこまれる姿を眺めて、生命を縮める宮仕への苦勞を思ふては、涙のにじみ出るのを禁めえなかつた。

刻々に蒼白さを増してゆくかと思はれる公の顔色、めつきり衰へるへの見へて來た公の容子、しかも非常な覺悟で何事かを固く思ひ定むるやうな公の態度、それはむしろ悲壯の感を與へるものであつた。かれこれ三時間の餘も、公はかうして『深甚の考慮』を重ねてゐた、其間官邸から二度、狀箱に入れて固く封をした書類が届く。お鯉がそれを取次ぐと、公は黙々として

なほも考へに沈まれる。夜は次第に更けて行く。やがて十二時を過ぎて何分か経つた時、けたたましく門を叩く者がある。お鯉は聞耳を立てる。

「誰れか家の者が聞いて居る様ですが、今頃誰れも来る筈の人はありませんし……でも家に違ひありませんから、私が行つて見て参りませう」

「左様じゃ、尋常の時ではないから、おぬし行つて見ろ」

斯ういはれて、お鯉は帯を引き締めながら、門の際まで出ていった。

(一一六) 兩公手を取て泣く

——眞に君國の爲に流す涙

時節柄油断は出来ない、深夜お鯉の處へ、桂首相の來て居る事を知るか、知らずか、遠慮なく門を叩く者は、そも何者？ と、お鯉は氣を沈着けて、門の内側から聲をかける。

「誰方ですか、門をお叩きになるのは、誰方か 仰らなければ、開けられませんから」
すると外では小さいながら、確かに聞き覚えのある聲。

「おい、お鯉か、俺だよ、く」

どうも伊藤公のお聲らしいが、と、考へて居ると、傍に來て居た護衛の警部が、門の隙から外を覗き見して、確かに伊藤公です、と云ふ、それではと、警部の手で門が開かれると、ぬつと入いつて來られたのは、果して伊藤公であつた。

「桂、居るか」

「えい、いらつしやいます」

「逢はして呉れ」

下の座敷に伊藤公をお通しして。

「いま、調べ物をして居られますから、一寸お待ち遊ばして」

二階へ上つて、伊藤公のお出の事を取次ぐと、桂公は。

「おう、伊藤が見えたか」

蚊帳のあるのも忘れてか、轟然と立つて階下へ行かれやうとされたので、蚊帳は引摺られて一方の釣手はサツと外れた、お鯉が蚊帳を除けやうとする間も悶かしく、公は大急ぎで階段を降りて行かれた。

外れた蚊帳は、机の上の燭臺を倒して、蠟燭の火は蚊帳に燃え移る、お鯉は必死になつて揉み消した、まづは何事も無く済んだが夫が爲め、華奢な消防手の手はやけどをして了つた。

まあよかつたと、お鯉は胸撫で下しながら、心にかゝる階下の座敷へ降りて見ると、これはまた何うしたこと——。主人の公爵は、客の公爵と、互に手を取り合ふて、泣いて居られるで

はないか。

端なくこの光景にぶつかつたお鯉は、電氣に撃たれでもしたやうに、闕際に立ち竦んでしまつた。

六十五歳の元老伊藤公と、五十九歳の首相桂公とが、深夜人定まつた後、兩人手を把り合ひながら涙に泣きぬれてゐる。時は日露媾和の直前である。兩公談合の事柄が、帝國の浮沈に關する軍國の大事であるのはい、までもなからう。

座敷に入り兼ねて躊躇つてゐるお鯉の耳へ、聞くとともになしに聞へた兩公の對談は、どういふ話の續きか、伊藤公の

「うむ、左様だよ、お前のいふ通りになつたのだよ」

といふのを受けて桂公

「本當か、それでは松方も、大山も、誰も彼も承知したか」

非常の重大事が着いたらしい様子で、涙の中にも主客はホツとしたらしく、顔を見合せながら後は暫く無言の體である。

やがて桂公は心づいてお鯉を顧み、

『お照、葡萄酒を持つて来い』

なみくと酌がれた葡萄酒の杯を、一呼吸にぐつと飲み乾した兩公。

『さあ、来い』

『よし、行かう』

相携へて夜更の門を出て行かれた。

靡げながらお鯉にも、讀める節がないではない、多分今夜は夜を徹しても、御國の大事が取極められるのであらう。すると又いつ何時御用があらうも知れぬ、手狭まな妾宅ながらいつでも御役に立つやうにと、先きに立つて座敷中を掃き清め、食事も有合ふ品で直ぐの間に合ふやう心積りして、その夜はまんじりともせず、宿直する武士の心地で夜を明かした。

(一一七) 媾和記念焼穴の蚊帳

——夜中の伺候に着る新調の袴

緊張し切た夜が、まづ無事に明けた、主人の公爵は昨夜伊藤公と一緒に出掛けた限り、遂々お鯉の家へ歸られなかつた。

やがて永田町の官舎から、警部が使者に來た、其口上

『昨宵は世話であつた、もう此方へ歸つたから、との事で御座います』

まあ御無事で好かつたと、お鯉は安心の胸を撫で卸した。

間もなくまた、別の使者が來た。

『新しい袴が出来る様な話であつたが、出來て居たら欲しい』

との事である、それは誂へてあつた袴が、今日出來て來る筈になつて居たのである、急に御入用なのであらう、直ぐ使をやつて、待て居て新調の袴を受取り、お鯉はそれを携て、官舎へ

急いだ。

お目に掛ると、公爵は昨宵とは打て變つた元氣である。

『イヤ、大變に忙がしくなつてね、今夜は夜中でも御所に上らなければならぬかも知れぬ、夜中はフロックでなく、袴でないと、御寢所へ伺候するに不可ぬ場合もあるからね』
急いで持て來た袴が、まあ間に合て善かつたと、こんな些細な事にまで、お鯉は女らしい感激の涙が湧いてならなかつた。

* * * * *

伊藤、山縣、松方、井上の諸元老と、大山満州軍總司令官、兒玉參謀總長、それに總理の桂公、外務の小村侯が加はつて、靈南坂の伊藤公の官邸で、夜更くるまで媾和問題を評議したが、議合はすして桂公は一旦お鯉の家へ引揚げ、獨り深思熟慮を凝らしてゐるところへ、伊藤公が追つ掛けて來て、桂公退席の後辛うじて他の人々の議を纏めたといふ報告を齎らしたのである。その時には平生沈着な桂公も、餘ほど昂奮してゐたものと見え、蚊帳のあることも忘れて室を出やうとし、机上の燭臺が倒れて危く火事を出しさうになつたのだが、お鯉が懸命の努力で消し止めた。蚊帳にはそのため三尺四方ほどの焼け穴が出來た。

それからすつと、後日のことその焼け穴を眺めながら、公はお鯉からその夜の談を聞いて、しばらく感慨無量の體であつたが、やがて徐ろに口を切つて、

『あの時は媾和問題を決する時だつたんだ。媾和條件を、此方で無鐵砲に威張り散らし、もし容れられなければ、戦ふまでといふやうな力が、實はもう無くなつてゐたのだから、辛かつたのだ。列國の同情を失つても大變である。國威を失墜せず、利權を損せず、相手の面目も保たせねばならぬのだから、内外實に困難で、自分は死を覺悟してゐたよ』

公の述懐を聞きながらお鯉は、その前後の様子を歴然と思ひ出されるので、胸が一杯になつた、すると、公爵は思ひ出したやうな調子で、

『焼穴の出來たのはあの晩のことだ、媾和記念の蚊帳ともいへる、蚊の入らぬ様、紐でいも括つて置いて、來年の夏も吊らうじやないか……』

ハ、ハ、ハと一笑されたが、公の目にも涙の露が光つて見へた、當時の苦心慘憺を思ひ浮べたものであらう。

さすれば大切な記念の蚊帳である、まさか焼穴を紐で括つて置くわけにも行かない、お鯉は同じ白麻の布で穴を塞ぎ、それから毎年九月五日の靖和記念日が来ると、件の蚊帳を吊つて當年を偲ぶことを忘れなかつた。

(一一八) 日比谷焼打事件の發端

—— 一番覗かれたお鯉の妾宅

想ひ出してもぞつとするのは、日比谷の焼打事件である。

江戸から東京、何百年來築き上げられた都市の安寧秩序は、ものゝ見事に踏み躪られ、撲き壊されて、満都市民の膽ツ玉をでんぐり返らせた。

いふまでもなく、焼打事件の根本は、ポーツマスにおける對露媾和條件に、戰勝國たる日本が、一錢の償金をも取り得なかつたといふ不満から、國民的不平が一時に勃發したのである。

戦へば勝ち攻むれば取る、この勢ひでモスコイまでも押して行くと、熱狂しきつて居る國民と、既に力の有ツ丈を出して了つて、もう此先、手も脚も出ない事を知て居る當局者と、立場が違へば肚裏の違ふのも仕方がない、煽りが利き過ぎて、今は却て當惑して居る當局も、實は必ずしも目前が見えなかつた譯でもあるまい。

現に事變の三日、桂首相は一書を山縣公に送つて、かくならんとする形勢を説き、それに處する覺悟をも洩らして居る。

仰せの如く媾和始末には、豫て想像仕り居り候如く、随分騒がしく、(中略)舊對露同志會の變體媾和談判同志會なる對露同志會員等と、進歩黨關係の新聞記者連、之れに渡邊國武一派の連中、入り雜り候團體より、種々雜多の手段方法を以て、下層の人民の心を刺戟せしめ候故、政事と社會と混同致し、目下の處車夫馬丁の輩より、償金が取れぬと云ふより、小賣人の仲間に迄、何となく事柄の是非を辨せず、騒々敷有様にて、此邊は餘り宜しからざる情況に付き、此際は成るべく此問題をして政事問題にのみ引込み候手段、緊要と存し、而して夫々手段を盡し申候、豫ても言上仕り候通り、此大問題の解決は、元より容易の業に之れ無くは覺悟の前に之あり候間、成るべく慎重の態度を取り、漸次鎮靜の情勢に向はしむるの外、好き方法も此れ無き事と決心仕候(下略)

* * * * *

然し不平不満で燃え熾つてゐる國民の興奮は、なか／＼生柔しい事では鎮まらなかつた。明治三十八年九月五日の午後一時から、日比谷に開かれた國民大會に對する警察の處置が、あまりに高壓に過ぎたといふことから、端なくも民衆と警察官の大衝突を來し、瞬く間に日比谷界限から丸の内一帯、さては市中一圓にわたつて至るところ警察署、派出所の焼打ち騒ぎとなつた。

もうかうなつて來ては手が着けられない。いきり立つた民衆は、眞赤な血と火を浴びてすつかり逆上つてしまひ、刻々にまして來る味方の人數に鼓舞されて、丸の内諸官省などを片端から襲撃して廻つたが、疲れ切つた警官は手の出しやうもなく、街上はたゞ彼等民衆の暴れるまゝに任された。

中でも永田町の首相官邸、三田小山の桂公爵邸などは、第一に民衆の襲ふ處となつた、警官隊はこゝを先途と極力防戦に努めた、小山町では、人民の交通を遮斷して、嚴重な警戒を施し、辛くも暴民の闖入を防いだ程である。ところで榎坂のお鯉の家は如何であつたか。

(一一九) 全市街が修羅の巷

——お鯉の家は焼かれた風聞

これより先き九月の一日頃から、お鯉の宅へ、怪し氣な手紙が舞込んで来る、勿論、差出人の名前などは記してない、書いてある事は、何れも物騒千萬なものばかり——。

「今頃、何故に講和をするか、桂は國賊である」

「ヤイお鯉貴様も日本の女だらう」

「いやしくも國家の臣民ならば考ふ所あれ」

「来る金曜日までに、かならず汝の手に依て、桂を殺せ、殺さぬと其の分には置かぬぞ」

東京市内からは素より、遠きは九州の久留米、長崎を主にして、日本全國あらゆる方面から、こんな書面が束になつて来る。如何して手に入れたか中には桂公の寫眞に針を貫したのやら、青痰を掛けたのやら、お鯉を罵りつて、妖婦、奸婦はまだしも、口にも筆にも出来ない下劣な

文句を連ねたのが山の如くに来る。

薄氣味も悪いし、棄てゝも置けず、お鯉は四日の朝、一と纏めにして大風呂敷に包み、何かの御参考にもと、永田町の官邸へ持つて行つた。

主人の公爵に「こんなものが」とお目にかけると、公は笑つたまゝ傍の卓上を指さし、見ると同じ様な手紙の束が何層倍といふほど積み上げてあつた——みんな封も切らずに。

(1110) 官邸の非常日から

— お鯉は焼き殺されたさいふ噂さ

焼打の前日——九月四日——永田町の官邸にゐたお鯉は、榎坂の家から急の使者が来たので、取敢ず歸つて見ると、何やら家の周圍に怪しげな人間が彷徨してゐる。薄氣味悪く思つてゐる所へ、京橋の山下町から豫て懇意な上田の奥さんが、目の色變て飛び込みざまに、こんな話しをして聞かせる。

『今私は、山下町の宅を出て、いつもの様に土橋で榎坂までやつておくれと辻車に聲をかけたら、車夫は變な顔をして「ナニ榎坂？ 榎坂が聞いて呆れらア、お鯉の近所へ行くんだらう、そんな所に何十兩くれたつて、眞つ平だよ」まあ如何でせう、かうなんですよ、どうか何事もなければよいが……』

これは容易ならぬ事だ、あゝいふ社會の者まで、既にそんな事をいふやうでは、尋常ならぬ空気が世間一般に漲つてゐるに違ひない、兎もあれ公のお耳に入れて置かう——お鯉は永田町の官邸に取つて返した。

桂公はお鯉からこの話を聞いて。

『車夫が榎坂には行かないといふたか、ふうん、さうか』

やゝ暫らく、沈吟の體であつたが、やがて頭山滿翁や杉山茂丸氏に自から電話を掛けられる。それから人をもつて、地方の或る社會の人々に電報を打つやうにいひつけられた。

その翌日があの大騒ぎである。

國民大會——示威運動——正面衝突——官邸襲撃——拔劍——放火——殺傷

東京は一時全く無警察の状態になつた。

お鯉は當日永田町の官邸にゐた。

こゝも警官だけの護衛では手薄とあつて、遽に軍隊が出勤することになり、官邸の周圍は、つしり軍隊に包圍された。

官邸の玄關には、杉山茂丸、小美田隆美などの面々、鎖帷に後ろ鉢巻、明煌々たる自慢の

名刀を抜き放つて、寄らば斬らんと身構へてゐる。

御注進が引つきりなしに来る。

形勢は、刻々危険になつてゆく様子。

そこへ誰の口からもなく、榎坂のお鯉の家が焼打になる、イヤ今ごろは焼かれてゐるかも知れぬといふ噂が聞える。

そこには目の見えない母がゐる、五人の使用人は女ばかりである、それに昨日から泊りがけの上田の奥さんは可愛い孫を連れてゐる、男つ氣といふものは一人もない。

お鯉自身は首相官邸にゐる限りまづ大丈夫である、よし萬一の事があるにしても、主人の公爵と運命を共にするのだから、却つて本望ともいへる。たゞ女ばかりで留守をしてゐる人達が、頼りになる人もなく、定めし心細がつて慄へてゐるだらう。

お鯉はゐても立つてもゐられなくなつた。

「私は一寸家に歸つてまゐります」

お鯉のこの言葉は公爵には意外であつた。

「いま出掛けては危険い、こゝにをりさへすれば安全ではないか」

「でも家には親がをります、しかも義理ある親です、多勢の奉公人にも怪我をさせては濟みません、何處か安心な所へ逃がしてから歸つて参りませう、私の家に居合せたがため、人の子に迷惑はかけられません」

いひ出したら聞かないお鯉の氣質を、公爵はよく知つて居られる。

「左様か、では氣をつけてゆけ」

おゆるしが出たので、お鯉は支度もそこゝに官邸を出て、榎坂の家へ急いだ。これがその後一年間、公爵と相見ることの叶はない別れにならうとは、お定まりの文句ながら。

「神ならぬ身の」知る由もなかつた。

さて首相官邸も、もう表口からは出られない、己むを得ず官邸の庭先から、座敷前を通り抜け、警部の案内で非常口から脱け出した。

榎坂の家は、それでも未だ無事であつた。しかし女ばかりの留守居の人は、周囲の騒ぎに脅かされて、何れも生きてゐる空はなかつた。

今は一刻も躊躇すべきでない。

『上田のお婆さんは、孫の幸ちゃんを連れて早くお歸りなさい、今の内です』
無理に車を頼んで送り歸す。

次は女中の始末である。

『兎に角親元へでも親類へでも、みんな一先つ歸つておくれ、この家は危険なのだから、私もこゝにゐられないかも知れないのだよ』

大急ぎで支度をさせて、それ／＼送り出して居る處へ、意外な報告を齎して、おしん（お鯉の實母に附けて有る女中）が飛び込んで来た。

『私は前勅金春の家（照近江）をしますと、いまお鯉を焼き殺して来た、さういつて威張つて通る恐ろしい人達に出あつたんで……』

胴慄ひがして口もろく／＼利けない、それでも安否を尋ねに来たのである。

『有難うよ、私はこの通り無事でゐるから安心おし、でもお前は直ぐ引取つておくれ』
お鯉は弱い顔を見せてはならぬと思つた。

* * * * *

お鯉を焼き殺して来た、豪語して通る恐ろしい人聲を聞きながら、お鯉の實母小久江ふくは、金春新道の照近江二代目お鯉の許に預けられて居た、當時二代目は、初代の家を其のまゝの看板で賣り出してたが、お鯉の名に敵がい心を持つ彌次馬連は騒動の當日、二代目お鯉の家を釘づけにして家の前に石油罐を積み重ねた、そして三十分をきに喊の聲を擧げておびやかす、五日六日の兩日、夜は電燈を消して終日終夜吞まず食はずに怯へ明して六日の深更、初代から預けられた、老母と、自身の實母みつ子の手を引いて二代目お鯉は裏口から忍び出て、實兄團右衛門が住んでる南鞆町まで命から／＼落ちのびたといふ、二代目お鯉、現在阪東彦三郎の妻女君子は生涯に無い恐ろしい想出として語り草にして居る程である、以て當時のさまが覗はれる。

(二二二) 別れの杯は白葡萄酒

飽まで主に殉する健氣な女

時々聞ゆる喊の聲、諸方に見える火の手、黒煙り、形勢は次第に悪化して来る。

其内、靈南坂の警察署長が自分でやつて来て曰ふ。

『漸々夥しい群衆が、押寄せて来て益々危険になります、お宅を守りたいは山々だが、此附近には亞米利加大使館や、伊藤公の官邸等があつて、人員不足で思ふ様に手が廻らない。萬一の事があつては大變だから、一刻も早く此を立退いて頂きたい』

御尤もである、然し斯うなつては、余の人は知らず、お鯉としては兎ても白晝面を曝して、外は歩けない。官邸への道も、塞がれたと同然である。愈々最後の覺悟をしなければならぬ。夫に就けても、心配なのは盲目の養母である、此人に怪我でもさせては、自分として相濟まぬ。

そこで車へ乗せて、新宿の知り合へ送り届けさせることにする。

然し養母は承知しない。

『私は斯様不自由な身體だし、死んでも好から、娘の傍に置いて貰いた』
其の心持は察するが、此の場合そんな譯には行かない。やつと慰撫めてゐるところへ車が来た。いざ出掛けると云ふ時、お鯉は不圖、事に依ると之が今生の生別になるかも知れぬと思つたので、名残りの盃を舉げやうとお酒を探したが、日本酒は見當らない。
有り合はず白葡萄酒を滿々とコップについて母の手に持ち添へ。

『さあ、お婆さん、元氣をつけていらつしやいね』

盲目の母は不安の思いに満たされては居るが、豈敢に可愛しの娘が、死別を覺悟しての別盃とは心附かず、手にしたコップを半分ばかり、ぐつと傾ける、お鯉は養母の飲みさしの葡萄酒を、溢れ出る涙と共に、一氣に呑み干して。

『さあ、お婆さん、お出掛け』

元氣よく送り出しはしたが、其時飲んだ葡萄酒の味の苦かつた事は、お鯉はいまだに忘れる

事が出来ない。

五人の女中も、それ／＼心當りの處へ歸した、ところが僅か一月許りに雇い入れた青森生れのお針女におとしと云ふのがあつて、此女は如何しても歸らぬと云ふ、刻々に迫る主人の身の危険を案じて、死生を共にすると言ひ張る。

「お前はそれで善いとしても、萬一の事があつた場合、私がお前の親御に對して申譯がない、その心持は誠に有り難いが、お前はどうぞ行てお呉れ」
お鯉にかういはれても、おとしは頑として動かうとしない。

「いゝえ、譬へ如何な事がありましても、御奉公に上つた以上、其の御主人と生死を共にして、それで不足を云ふ様な親達ではありません」

天晴れ健氣な覺悟、見上げたものである。天下を擧げて自分を呪ふ世の中に、こんな美しい人情を傾けて呉れる人もある、お鯉は思はずおとしの手をとつて嬉し涙に咽んだ。

戦國時代には、斯した場面も數々あつたであらう、然しお鯉としては、其實際の場合に臨んだ筈もなし、そんな事に出會はうとは思はなかつた、斯様事は寧ろ芝居の舞臺で見ると位に

しか考へて居なかつた、然るに思ひも掛けず、自分が今其境遇に墜ちて、必死の場合になつた時、却つて己が劇中の人物でもある様に感じて、只もう美しい感激が湧く、假にも一國の宰相の寵妾として、しかも日露の戦争と云ふ大きな背景の前に、異常な運命に打かつて行く、何と勇ましい立派な事であらうと、自分ながら歎美の情さへ湧いて、死ぬ事などは恐くも怖ろしくもなかつた。

(一一三) 薄化粧に死装束

—— 又も嬉しい植木屋の俠氣

いよく二人ぎりになつた。いざさらば濠を深くし、壘を高うして寄せ手の迫るを待たう—— かう腹を据ゐてゐると、臺所の方で何だか人の氣配がする。

オヤ、もう何者か忍び込んだか、度胸のいゝおとしが、こつそり行つて見ると、こは如何に、出入りの植木屋の榮次郎が居た。

その頃お鯉の家で井戸替へをするため、榮次郎が監督になつて、いろ／＼世話を焼いてゐたのだが、丁度五日のこと、家が如何なるかさへ知れないのだから、井戸替どころの沙汰ではない。それで一同を引取らせたのに、榮次郎だけ残つてゐたものと見える。

「おや、榮さんぢやないか、何故早く歸らないの、親御は大病で臥てゐるはずぢやないか、今日の騒ぎで嘸驚いてゐるだらう、お前さんが私の處へ來てゐることを知つてゐるのだから

ね、さあ早くお歸へりよ」

平常無口で、お鯉の前では碌にもものいへない榮次郎が、きつぱりした調子で口を開いた。

「いゝゑ、歸へりません、今聞いてゐたら昨日今日上つた女のおとしさんですらお傍にゐやうといふのに、永年お出入りを願つてゐる私が、如何して歸へられるのですか、戸外の騒ぎを聞くだけでも、女衆ばかりでは恐い筈です、これでも男の端くれです、何かの御用に立ちませう」

坐り込んで動く氣色も無い。

お鯉は其志を聞いて、口が利けなかつた。

* * * * *

門扉を閉鎖して主従三人、物凄しい周囲の呼び聲や、時々亂射するピストルの音を聞きつゝ、如何なる事かと居悚んでゐると、けたいまいしく門を叩く者がある。誰ぞ來たかと耳を澄せば。

「肱岡です、肱岡です、一寸こゝを開けて下さい」

肱岡といふのは、毎も公爵を警護して來る警部である。さらばと安心して門を開ける。警部

は息せき切て。

「官舎からのお使ひです、兎ても危険な状態になつて来たから、早く逃がして来いとの事があります。私の考へでは、御近所の事でもあるから、赤坂の長谷川が善からうと存じます。御承知ならば、之から歸り掛に、立ち寄つて左様申して参ります」
行届いた話である。

「有難う存じます、承知致しました、御卒御心配下さいませんやうにと、申上げて頂きます」
お鯉の返事を聞くや否や、脇岡警部は、倉皇として歸つて行く、間もなく長谷川から、彌生の叔父さん（お鯉の縁者）が消防夫を伴つてやつて来た。長谷川は赤坂の待合、彌生の叔父さんの妾が營つて居る家である。

叔父さんが、馳けつけて見ると、此騒動の最中に、お鯉が落着拂つて居るので呆氣にとられてゐる。

「さあ、早く、早く、私の處まで引揚げやう」

だが、お鯉は動じない。それには仔細がある。といふのは今全市にわたる暴動も、其の本當

に目指すのは二三人の身の上にとつてゐるはず、僭上の沙汰かも知らぬが、自分も慥かに何人かの目標になつてゐるらしい。

「お鯉を殺せ」

「お鯉を弔り殺しにしろ」

かういふ叫びは自分の耳にも聞える。此の際なまじ脱れやうとして、却つて醜骸を路傍に曝すことは恥の上の恥だ。どうせ死ぬなら、想出多い此の家で、潔く生害して果てやう——そこで、逃げる逃げると、急ぎ立てる彌生の叔父さんに。

「私は此の家を一步も出ますまい、どうぞ貴方は引取つて下さい、」
今度は叔父さんが承知しない。

「そんな事をいつてゐると、いよくあぶない、さあ早く、私の處へ行くのは官舎からの差圖だ、それでも行かないといふのか」

お鯉が利かぬ氣を知つてゐる叔父さんは、當惑顔であつたが、自分の家も氣になるので、後髪を引かれる様子で歸へつて行つた。

これでいよいよ外部との連絡は絶へた。この上は城を枕に討死の外はない。立ち上つたお鯉は、今朝官邸へ行く爲めに結び上げた丸髷のほつれを鏡臺の前で直して、薄化粧に心を沈着け、箆笥から取り出したのは、まだ簪糸の取れない小紋の晴れ衣、紋所は花菱(公爵家のもの)白麻の襦袢、腰紐まで新しいのに取り替へ、黒の丸帯に白の扱帯。

この年二十六のお鯉の死装束、今はの際の身だしなみである。次には公爵が、日清戦争に携帯した記念の品として與へられた短刀、この一刃を肌身に附け、庭に沿ふた十畳の坐敷に端坐して、机の上に沈香を焚き、日頃信仰の觀世音菩薩普門品を心靜かに讀誦しつゞけて更に餘念もない。

ところが門外一步、忽ちにして修羅の巷である。暴徒の一團は大濤の崩れる勢ひで大路小路に殺到し、それ彼方へ逃げた、此方へ廻つたと、警官と民衆と、追ひつ追はれつの大騒ぎ。その中に日は漸く暮れる、が騒ぎは鎮まるどころか、あべこべに勢ひを増して、間近に起る鯨波の聲は、今しもアメリカ大使館を襲撃の最中と知れた。

(二二三) 危く助かる隣家の唐黍畑

——二丈餘の繩梯子が命の綱

心頭を滅却すれば火もまた涼し！ 戦のやうな戸外の騒ぎを餘外に、靜かに觀音經を讀誦してゐるお鯉の部屋へ、いきなり入つて来たお針女のおとしと植木やの榮次郎、唐紙を開けた途端アツといつて暫らくは棒立ちに立つてゐたが、やつとの事で榮次郎が口を利いた。

「御新造さん、貴方は無益ない事を爲すつては不可ません」
榮次郎はお鯉の身支度や、其場の状態から、之は的切り自殺の覺悟と、早合點をしたのである。そこでお鯉は。

「心配する事はありません、門を破つて入られたら、如何にもならないからです、お前達は逃さへすれば善い、此の家へ押し寄せるのは、私が目當なのだからね」
だが律儀者の榮次郎は、お鯉を見殺しにして、自分だけ逃げ出そうといふ氣など微塵もない。

『どうぞ、そんな事を言わないで下さい、私は一生懸命に繩梯子を造へて居たのです、丁度日も暮れましたから、裏の崖を降ると井上勝さんの唐黍の畑です、其處に忍んで居たら、其中には何にかありません、無理に死ぬ事はありません、さあ、いらつしやい』

さうだ、榮次郎の云ふ通りだ、何も早まつて死ぬにも及ばない、只無残々々野次馬の手に掛り、醜い最期を遂げたくない許りである、免れられるものなら免れるのが本當であらう、乃で榮次郎に連れられて、おとしを後に裏庭へ行て見る。

以前の鐵道長官井上勝子爵の邸は、表は亞米利加大使館の並に向いて居るが、裏はお鯉の宅の直ぐ裏まで續いて居る、其地境は二丈餘の崖になつて居て、見下すと唐黍が生い繁つて居る畑、成程此なら身を匿すに尤も善い場所である、乃で三人は榮次郎の造へた繩梯子へ捉まつて、漸々の事で畑の中へ降りた、畑は却々に廣い。

さて隠れるに適當な處を捜す爲に、黒塗の手燭雪洞の光りを洩さじと袖に掩ふたおとしを先頭にしてお鯉を中央に挟み、殿は榮次郎、聲を潜め梵音を竊んで、畑の畔を辿り行く姿は、城を落る大名のお部屋様ともいへやう。

やがて何やらの木立の繁茂した小暗い場所を認けて、三人は一團變になつて、佇んだ。

『まづこれで善い、如何な亂暴者も、まさか此處までは探し當る氣支はあるま』

吻と一息吐いたが、口を利く者は一人もない。

ところで、之から如何なることやら、見當も附かず、思案も浮ばぬ、只茫然と時を過して居る間に二時間はすぎた。

其間に、榮次郎がこつそり例の繩梯子を傳つて家の様子を見に行つた、すると驚くべし、三人が免れ出てから間もなく、暴民の一團はお鯉の家に殺到して、門扉を破壊し坐敷まで闖入したが、驅けつけた警護の兵士に銃剣を突附けられ、こゝで一場の大格闘が演ぜられて、大分負傷者も出た様子、現場の慘たる光景に、榮次郎は眞蒼になつて島の避難場へ逃げ歸つた。

息を殺して、此報告を聞きながら、お鯉は「まあ善かつた」と思つた。今少し彼處で逡巡して居たら、如何な運に會つたか知れない、事に依れば、今頃はもう此の世の人で無くなつたかも知れない——と思つてみると、周邊の木蔭に物音が聞えて、何やら人の近寄るやうな氣配がする。お鯉は屹となつて、闇を見つめた。

(一二四) 置き所なき身一つ

—— 遠くから手を揮て寄せ附ぬ

すると、二三人の蹙音が間近に聞えて、闇の中から聲をかけられた。
「誰だ、そこに居るのは」

その聲音で、お鯉にはそれが井上子爵の令息の陸軍士官と知れた。

お鯉が今身を潜めてゐる唐黍島の持主、井上勝子爵の邸では、主人の子爵は既に老年で閑地につき、一人息子の近衛の中尉殿が毎日隊へ通つてゐる時であつた。

そこに突然焼打騒動が始まつた。中尉殿は特に十数名の兵士を引連れ、自邸の内外を警戒してゐた。といふのは民衆の目指してゐるアメリカ大使館が、子爵邸の隣家で危険だからである。表の騒ぎに氣を取られてゐる中尉の耳に、「裏の唐黍島に何やと怪しい人が潜んでゐる」といふ報告があつた。中尉は二三の兵士を連れて、自ら検分に出掛けて来たものらしい。

お鯉は中尉殿を知て居た。其人は平岡氏の娘さんと婚約の間柄で、其媒酌には同郷の誼で桂公が頼まれ、當時其話が進行中であつた。

「誰だ、そこにゐるのは」かう誰何されたお鯉は

「私は安藤で御座います、とんだ處を拜借して、相済みません」
と云ふと、中尉殿はツカ／＼と寄つて来て。

「あゝ安藤さんですか、御心配でしたらう、さあ此方へ入つしやい」

すん／＼先へ立て畠に續く庭前から、松、杉、檜などの木立の間を通り抜け、常には明けぬ數寄を凝した茶室へと請じ入れた。軍人らしい卒直さで、心からの親切な待遇振りに、お鯉は地獄で佛の思ひがした。

間もなく老女が現はれて、お茶よ、お菓子よと丁寧な扱ひ、此騒ぎで多分夕食も取つて居られまい、何は無くともと、御膳が出る、如何にも行届いたものである。

これこれと主従三人、中にも植木屋の榮次郎、安心の胸を撫でをろすと、忽ち想ひ出すのは大病の父親の事である。

『私は一走り行て見て來ます』

緩り行てお出で、此はもう心配の事はないから、そういつてやつた榮次郎は、夜半の二時に
行て、三時半には歸つて來た。そんなに急がずともよいのにといいへば。

『ナニニ大丈夫、親父は未だ生きて居ます』

如何にも江戸つ子らしい挨拶である。そちこちしてゐる間に東が白む、夏の夜は明け易い。
明くれば九月の六日、世間は一向に鎮つた様子もない。然し何時まで此に斯うして居られな
い。お鯉は夜中種々と考へた揚句、今戸の寺へ行かうと決心した、此なら自分の身一つぐらゐ
入れて呉れる餘地があらう。

今戸の寺はすか甚の縁家である。まづ魚河岸のすか甚へ、おとしを遣て聞かせる事にした、
すか甚は、昔時から懇意な魚問屋である、その女將さんは始終親切にお鯉の世話をし呉れ
る人である、萬望善い便りを持って歸つて呉れ、ばと、念じて居ると、やがておとしは情け無さ
うな顔をして歸つて來た。

『すか甚の女將さんが、遠くの方から私の姿を見ると手を振つて、來て呉れるなど合圖を

して、どうしても家へ入れて呉れませんか』

成程河岸の問屋は人出入が多いので、お鯉との關係も直ぐ世間に知れ、お鯉の世話をしたな
どと云へば、如何目に會ふかも知れない、彼の俠氣の女主人が、自分の使者を寄せ附けないの
は能々の事だ、自分に對する世評もこれで十分のみ込めた。もう外を捜し廻るのは斷念して、
この上は如何に覗はれて居てもたつた一つの、自分の家へ歸る外はない、庭續きに例の繩梯子
によれば、直ぐ隣家である、よし歸ると決めやう。

そこで、昨宵からの御禮の山々を繰り返して、畑の畔から歸らうとすると。

『庭續きにお出になつては、夜の間は分りませんが、晝は赤坂の通りから善く見えます、危
險千萬の事……』

いかにも井上家の申分は御尤もである。自分の安否は別の事、自分を匿まつた事が世間に知
れては、井上家の迷惑も思いやられる。左様までに迷惑がられる自分には、一體全體何の咎が
あるのだらう？お鯉は熱々情なくなつてしまつた。

(一一五) 町内から立退の嚴談

——兵士に送られて我家へ逆戻り

廣い世間に身一つの置き所さへなくなつたお鯉は、火の中に飛び込む思ひで、萬人の呪詛の的となつて居る、榎坂の自分の家へ歸ることに肚を定めた。

井上子爵邸の表立關から、おとしと二人、お客様のお歸りの様にして、二臺の俵に乗せられ、折しも降り出した雨を勿怪の僥倖、小暗い幌の中に身を縮めて姿を隠した。

井上邸と、お鯉の家とは、裏から行けば例の細梯子一つの藝當で濟むのだけれど、表から行けば、米國大使館の前を通り、靈南坂を上つて、伊藤公の官邸に附いて右へ、ぐるりと一つ大廻りをしなければならぬ。

此の日から戒嚴令が布かれ、市中は到る處に兵隊が立つて物々しい警戒ぶりである。お鯉たちの俵が少し行くと、倏ち。

『待てッ』

と呼止められた。覺悟の上ではあるが、つひ悸つとして聲のした方を見ると、銃劍附けた兵隊が十人許り、どや／＼と俵を取捲く。

『何所へ行く?』

氣がさして、安藤ですとも云へない。

『阪正臣さんの隣家へ参ります』

お鯉の家の左り隣りは、御歌所の阪正臣先生の邸である、其隣りに住んで居るのは何者と、兵隊は知るか知らずか、別に何とも云はずに、『送りましたやう』と云て、送つて呉れる、門の前まで来て思はず身が悚んだ——、門扉には幾個かの銃丸の痕がまざ／＼と、昨夜の争鬭の激しさを語つてゐるではないか。

だが仕方がない、主従三人こつそりと我家へ忍び込み、戸を鎖して、聲も立てず、炊事の煙も上げないやうにして、その六日といふ日を送つた。

明くれば七日の朝、訪ふ人のある筈もない立關に、町内の代表と名乗る人が三人打揃つて來

て、主人に會ひたいと云ふ。何の事かと心配して、お鯉は聞耳を立てる。暫らくすると、榮次郎が来て云ふ。

『お隣の阪さんの代人と、榎坂下の葬儀社と、町内の醫者の三人が、赤坂區各町内を代表してお話して伺つたのださうですが、私では分らないから、御主人か、又は物の解る人を出せとの事です』

各町内を代表して、男が三人も来るのは、どうせ碌な事ではあるまいが仕方がない、お鯉は自ら玄關に現はれて、來意を問ふた。三人のいひ分はかうである。

『一昨日來の騒動で、赤坂の各町内は大恐慌である。貴女が此處に住んで居られると、何時町内を焼き拂はれるか知れないので、住民が安心してゐられない。今後引續き此家へお住ひになるなら、どうか町内全體に保険を附けて頂きたい、左なくば早速お立退き願ひたい』この手詰めの談判には、お鯉も弱つて了つた。

小さいながら、此の家はお鯉の所有家屋である。その家に所有主たる自分が住へなくなつたのである。まあ何といふ事であらう。

(一一六) 行衛定めぬお鯉の移轉

——三日三晩市中を彷徨ふ荷物

町内の者が寄つて集つて、お鯉に其家を棄て、立退けと云ふ、本當ならば暴民に壓迫される女生活の家を、近所の人が保護して呉れても善い筈のもの、餘りと云へば不人情な仕方と、最初は一圖に口惜しくも思つたが、又考へれば無理もない事、自分一人が覗はれて居る爲め、何の縁も由縁もない、近所の者にまで、其家や財産や、生命にまで危険を感じさせると云ふのは、誠に氣の毒千萬、相濟まざる次第である、此は綺麗に對手の云ふ事を承諾するより外に、致し方がないと、突嗟に考へ直したお鯉は、丁寧に會釋をして。

『それは誠にお氣の毒で御座います、然し私が町内全體に保険を附ける事の出来ないのは、申し上る迄ありません、で私は早速こゝを立退きます、どうか御安心下さいませやう』
どんな返事をするかと、お鯉の顔色を窺つてゐた三人の代表者は、意外に安穩な挨拶を聞い

て、安心して引揚げて行つた。

さてかうなつては、嫌が應でもお鯉は立退かねばならぬ、イヤ立退いた事にしなければならぬ、實を云へば戒嚴令も布かれて、市中は漸々平穩になつて行くのだから、この上の騒ぎはあ
るべき筈はないのだが、町内との約束は反古にも出来ない。

乃でお鯉は自ら筆を取つて、大きく貸家と書いた札を表に貼らせた、それから空の長持一
棹、箆二棹、その他瓦落多を少々荷車に積み込み、さも引越らしく見せかけ、榮次郎が附
添ひで榎坂の家から運び出させた。

引越しの荷物は、お鯉の家から擔ぎ出されたが、其落着くべき行先は、まだ決つて居ない、
實際其行先を定めるだけの、時間の餘裕もないのである、乃で車を引出す時になつて、お鯉は
附添の榮次郎に耳打をした。

「お前の知つて居る通りの次第なのだから、何所へでも私の知合の家へ行って、此荷物を當分
お預り下さいと、頼んで置いて来れば善いのだよ」
頗る便りない移轉ではあるが、仕方がない、榮次郎は快く承知して出て行た、すると日も

暮々になる頃、榮次郎は一人悄然して歸つて来た。

「御苦勞だつたね、荷物は何所へ預けて来たの」

「いや驚きました、まづ築地から日本橋、魚河岸の方まで、お知合の處を一軒々々廻つたの
ですが、何所でも引受けて呉れません、やれお氣の毒だがとか、場所が無いからとか、中に
は露骨に、其荷を預ると焼打をされるからと斷る家もあつて、兎ても駄目です、どうせ夜の
事には参りませんから、おしんさんの親父に任して歸つて来ました」

おしんとはお鯉の家の女中頭である、おや／＼大變な事になつたものだ、然しおしんの親父
なら、何にかして呉れるだらうと安心して、その先の事は氣にも留めずに居た。

其荷物が、それから何したかと云ふと、それが全く一つ話である、勿論後になつて分つた
事であるが、おしんの親父も一生懸命に持ち歩いたが、如何しても始末が附かず、先から先へ
と轉々して、三日三晩東京市中を彷徨き廻り、十日の夕刻になつて、お鯉とは知合でもない深
川の當盤津の師匠の家に、持ち込まれたと云ふ。

お鯉に對して世間の人氣が、いかに險惡だつたか、この話一つでも知れやう。

(一二七) 日のめを見ずに暮した十八日間

——公爵よりのお使は何

荷物でさへ既にこの仕末である、當の本人のお鯉を隠匿つて呉れる家のあるべきはずがない。それに永田町の官邸からは、あれ以來何の便りもない、此騒動では、それも無理はない。此上は自分で自分の身の始末を附けるほかは無。

さて如何したら善からう。智慧も、分別も、盡きてしまつた、そしてお鯉は考へた結果、ついに此の家に踏み留まる事に定めた。

立派に立退を明言した今日、正直で臆病な近所の人々を欺く事は、情に於て忍びないことだ。が仕方がない。乃で凡ての戸を閉切にして、夜も奥の間に只た一つの電燈を點けるだけ、それも光が外へ洩れやせぬかと心配する、食事拵へをするにも、生憎と隣家の阪正臣氏の臺所と、此方の臺所とが接近合つて居るので、公然に御飯を炊く事も出来ない。お鯉は田鼠の如く、冬籠りの熊の如く、此の間黒の中に、咳一つするのもはら／＼して暮した。

ひつそりしてゐる爲には、出来る丈け人数の少ない方が善い、そこで、忠義女のおとしは、世話人の處へ引揚げさせた。

植木屋の榮次郎は、貸家の留守番と云ふ名目で、毎日朝から通つて来る、此では炊事が出来ないから、榮次郎が辨當箱の中へ、毎日握り飯と、澤庵に梅干を入れて、運んで来て呉れる。時はまだ九月の酷しい残暑、締切の家の中の暑さは尋常でない、それでも夜になると、電燈を消して、戸を少し許り透して呉れるので、やつと息を吐く、晝は便所の中が少し明るいので、榮次郎が腹掛の中へ忍ばして来る新聞を、隅から隅まで目を通す。

行た事はないが、監獄よりも酷からうと想はれる不自由な生活を、一週間ばかり續けてゐる内に世間も大分鎮まつたらしい新聞の模様であるから、官邸の桂公へ當方の事情を知らせて置かうと。

「植木屋と二人で、無事に榎坂の家に隠れて居ります」

と云ふ事を、榮次郎を便りに報告した。官邸ではお鯉はもう疾に何所かへ避難して居るものと

思つて居たとの事、何をいふにもあの騒動ではあり、總理の公爵でさへ、うつかり参内すれば途中で命が危ないと云ふ場合であるから、お鯉が女の身一つでじつとしてゐるはずがないと思はれたのも無理はない。

其の苦しい生活をして居る間、お鯉は只た一度お湯に入つた、音のせぬ様、煙の出ぬ様、近所の目を忍んで風呂の湯を沸した榮次郎の苦心と親切とは、お鯉が生涯忘れ得ぬ事である。

* * * * *

焼打の始つた日比谷の國民大會の日——九月五日の午後、永田町の官邸で主人の公爵と、慌しい別れを告げて榎坂の家へ歸つたお鯉は、其後外部との交渉全く絶え、眞黒闇の家の中で、梅干に握り飯の生活が二十日近くも續いた二十三日の朝、始めて公爵家からお使者が見えたが女關に三つ指をついてお迎へする女中は元より一人もゐない、朴實な植木屋の榮次郎が、不器用に應接して奥へ取次ぐ。

「只今、お邸から田島信夫さんと云ふ方が御出になつて、御新造さんにお逢したいとの事です」

久し振のお便りは嬉しいことながら、其齎らしたお使者の役目は、吉か、凶か、兎も角急いで座敷へ請じ入れて、一通りの挨拶がすんだところで、田島氏は咳一咳して。

「之は公爵からのお言葉です、——」

長々御厄介であつた、よく世話をして呉れた上に、此度は自分の騒ぎの中にまで引入られて、迷惑やら、心配やらを掛けた事は、誠に申譯がない。そして能く自分に盡して呉れた事に就て、厚く禮を云ふ。

就ては自分も講和の事に就て、此の様な騒ぎを起した以上、身を退いて世の中を鎮めなければならぬ立場になつて居る、宜しく其所を察して、貴女は貴女で、身の振方を附けて貰ひ度い。

以上が公爵からの御言葉で御座います」

かう云つて田島氏は禿げ上つた額の汗を拭つた。

(二二八) 身を退いてくれ

札東はお持ち歸りを

桂公からの傳言は、前の文句に盡きて、之からは田島氏の言葉である。

「儲、公爵の御言葉は以上申上る通りでありますから、貴女は今身をお退きになるのが、貴女が公爵へ盡す最後のお勤めであるのです、それが眞實に公爵のお爲になるのですから、熱くお考へを願ひたい、其代り貴女が、之から何か御商賣でも爲される様に、此に壹萬圓の金子を持參致しました」

田島老人は、之で自分の役目が濟んだと許り、お鯉の挨拶はろく／＼聞かうともせず、否、何か言出す文句を聞かぬ間にと、手早く持參の風呂敷包みを解いて、壹萬圓の札束を其處に並べた。

この老人は元井上侯に引立てられた人で、金勘定が上手な處から、候爵が始終經濟方面の用

をさせ、其間には粹、無粹の仲の話などに使はれた人である、其邊の手腕を知つて、今や桂公も亦お鯉との關係を絶つべく、特に此老人を頼んだものらしい。

お鯉は、田島老人の口上を聞いてから、何と答へやうかと考へる前、先づ主人の公爵の心事に立入つて考へた。

何にもせよ彼だけの大騒動を惹起した責任上、桂公は身を清ふして天下國家に謝せんとするのは、當然の次第であらう。この二十三日に近い十八日に、公が先輩山縣公爵に寄せて、自分の中心の誠意と、今後の對策とを披瀝した書面は、實に能く公の心事を説明して居る、それは左に掲ぐるが如きものである。

* * * * *

(前略) 此度の都下の騒動は、實に意想の外に出で、畢竟前知の不完全の致す處と深く恐縮御座候、事此に到り候らば、非常の手段に出で、寸時も速かに人心を安堵せしむるは、當然の義と相考へ候

戒嚴令の一部施行、並に新聞紙條例の補足等、先づ武器を第一に實行し人民をして、此武器

に依らしむる方法を一方に取り來り候處、元來不良の奴等、此機に乗じ良民を誘導して、事此に到らしめたる義に候へば、熱度の冷却と同時に、日一日と人心も元に復し來り候、此間政府は充分冷靜に誠意を以て御一念を遂行致候はゞ、目的を達する事、難事に之ある間じく、否是非貫かねばならぬ事と相考居申候。

* * * * *

と述べてゐるが、その「人心をして安堵せしむるは當然の儀」といふ文言の底には、民衆が目の敵にして「桂のお鯉を焼き殺せ」と覗みの目標にしたそのお鯉を第一に身邊から退けて、世間の人氣を鎮めるといふ意味も或は含まれて居るかも察せられる。

お鯉にしても、其時まで既に久しい間、公爵に接近して、色々の打明け話しも聞いて居るのだから、公の思召の程は善く分つてゐる積りである。従つて此の場に臨んで恨みがましい事などいほうといふやうな心持ちは、毛頭ない。

ではあるが、一萬圓の金を持って來て、これで身の振方を附けるなどいはいはれるのは、何となく氣にそまぬ。金さへ出せば、人間は如何にでもなると思つて居るのがいやである、自分は藝妓上りである、公爵の妾である、それだけに、まさかの時は、金で事が済むと、思はれて居るのが堪らなく口惜しい。それに今度の扱ひ方だつて、誰の指金だか知れたものではない、主人の公爵自身から一本のお手紙も無く、只、お使者の口上だけで縁切り話を持出すのも、餘りに人を見くびつて居る。

湧き返る憤りに胸は張り割けるやう、ともすれば女氣の、悔し涙が目には溢れかゝるを、じつと堪へて、お鯉は田島老人にいつた。

「お言葉はよく解りました、御心持の程は尙よく分りました、お爲にならぬと云れます事は、生命を取られるより厭です、私が身を退く事——お邊を頂く事は、確かに承知致しました。どうぞお歸りになつて、御安心下さる様、申上げて下さい。

ところで其お金の事ですが、私は今何をしやう、彼をしやうと申す場合ではありません、此身一つを置く處も無い始末です、此お金で何かしたら立ち行くだらうと云ふのは、其方のお考へだけで、私としては、人中を歩く事も出来ない身の上です、ですから商賣をするお金の入用な譯がありません、今はそれ處でないのですから、此お金は、お持ち歸りを願ひましや

う、然し只今、仰つた事は、凡て承知致したのですから、御安心下さいませやう」

きつぱりした挨拶に、田島老人しばし言葉も無かつた、然し身を退く事を承知したと云ふ以上、再び説得する必要もなく、今の境遇では金は要ないから、持て歸れと云はれては、無理に押し附て置く譯にも行かず、物慣れた老人も此の處、一寸途方に暮れたらしい、が此の挨拶は、全く彼女の心のどん底の聲である、然し其の胸の中に蟠まる思ひは、必ずしも夫と同一でもない、斯な事に立到るのも、全く自分が妾であり、藝妓上りであるが爲である、女としては是ほど悲しい事があらうか、日頃自分と云ふものを、十分に諒解して呉れて居る管の公爵としては、餘りに分らない、何故其事情を手紙にでも認めて、身を退くやうにと云て呉れぬのであらう、此お金など、殴き附けて返したい處だが、此場合そんな事は出来ぬ、飽まで主人の體面を重んじ、其心事を尊敬して、何所までも御都合の善い様にするのが、自分の義務と云ふものであらう、お鯉の胸の中には、こんな感慨が矢車の如くに旋つて居た。

田島老人はお使者の役目も之で済んだと許りに。

「早速御承知下さいまして、有難う御座います、公爵も定めし喜ばれる事でありませやう」

きまり悪氣に、一旦取り出した札束を再び風呂敷に包んで、挨拶もそこ〜に歸へつて行つた。

其の夜お鯉は觀世音菩薩を安置してある一間に入つて、いま迄意地から堪へ〜てゐた悲しさ、情なさを思ひ出づれば涙は止め度なく溢れ出でて、身も世もあられぬ思ひである、そして心ゆくばかり泣きつくした其の後は、心も冴々と妄執の雲霽れて、只一片玲瓏の月を見る境地に入つた、そこで文机の前に東の白むまでかゝつて、一通の長文を書きあげ、やるせない胸の中を公爵に訴へた。

(二二九) お鯉より桂公へ

直々の御暇をさ

此度の騒動、お國の爲とは申しながら、返すくも一大事の御事、定めし御苦勞多く渡らせられ候御事と、恐れながらお察し申上げ、數ならぬ身も國家の泰平と、御身の安泰とを念じ續け居り申候。

まづは世も穩やかに、御身も御安らかに入らせられ候御事、有り難き仕合せと御慶び申上るにつけ、御骨折の程、一と方ならぬ事とお察し申上候。

儲、今朝ほど田島氏を以て御遣はされ下され候事、御事繁き折柄、誠に恐入申候、先頃中使を以て申上候通り、一時は如何相成るか、身のはても危ふく、覺悟致し候も、

御蔭様にて無事に我家に隠れ住む身と相成居候。折柄の御使、嬉しくも又悲しく承はり申候、私事御存じ置かれの通り、卑しき位地より出で候得共、幼き時より身も心も思ひ上りて生い育ち、心までは決して卑しからぬ積りに

之あり候。且那樣お爲とあれば、數ならぬ命を召され候とも、否とは申すまじく候を、御使しての御言葉は、聞えざる爲され方と悲しう存じ上候。

今日の場合、おひま下さるとならば、御自身に仰せ下さらず候や、御忙しとならば、其事只一と筆給はり候はゞ、得心致に候ものを、そのみならず、商賣にても爲し行くやう

と、金子を給はり候事、餘りにいやしめ給はるやう存じ上一入のおうらみに候。若し私事無理解にて、世をも人をも恐れず、何事か相始め候はゞ、反つて御名も出で、騒

がしき事と相成候事、必定と存候。鬼にも角にも、此の儘に都を逐はれて、山里になりとも身を潜め、暫らくは世に背き申すべ

く、此事御承知下され度く候。就ては、御手紙にてなりとも、私へじかにしかくと御暇給はり度く、それを御記念に都を

立出で申すべく候。

右の事、呉々もお願ひ申上候。

月 日

かしこ

てる拜

旦那様

(一三〇) 桂公よりお鯉へ

——榮枯盛衰は世のならひ

桂公がお鯉から此手紙を受取つたのは、二十四日の朝であつた、公が之を見て如何な顔をしたかは、他人の知らない事であるが、同じ日の夕刻には、其返書が早くもお鯉の手に届いて居る、匆卒の際の走り書ではあるが、申す迄もなく、公の直筆である。

たゞ遺憾な事には、その書翰は公よりお鯉への文書中、記念すべきものとして保存せし數十通とともに、大正十二年の大震災の際焼失していまは此の世に残つてゐない。しかしお鯉としては多大の感激を以て幾十回となく讀んだ手紙で、殆ど全文を暗記してゐるから、文句の思ひ違へはあるにしても、大體の趣旨に錯誤のない事を保證する。

桂公の消息の意味は次ぎの通りであつた——

* * * * *

手紙は繰返して讀んだ、お前の云ふ事は一々もつともの事であつて、胸を割かれるやうな思
いがする。

お前には實に氣の毒であつて、可愛想に思ふ、よく今日まで俺に盡して呉れた、そして今日
は自分としても、一生涯に二度とあるべからざる大事變に會ふたのだ、お前が其中に捲き込
まれた事は、よく／＼の因縁であると思ふて呉れ。

榮枯盛衰は世の習いである、何もかも世の中とあきらめて呉れ、今自分は大變な場合に立つ
て居るのである、お前にはよく分つて呉れる筈である、身命を抛つて國家につくして居る事
は、お前がよく知つて居る筈である。

俺は今何にも言へぬ、只誠心誠意で御奉公をするのみである、生命は君國に捧げて居る、世
間の毀譽褒貶などは、無論氣には掛けない。

然し世の中と云ふものは難かしいもので、理窟のみで行かぬ、人間の感情と云ふものも考
へねばならぬ、殊に政治家として、廟堂に立つて居る者は、社會の風潮と云ふ事も考慮せねば
ならぬ、俺は今一生懸命に世間を安靜にしやうと努力して居る、人に非難される様な事は、

自らも慎まねばならぬ、俺の爲を思ふならば、此事も十分に察して呉れ、而してお前の進退
も考へて呉れ、甚だ心苦しい事だが、悪しからず思つて貰ひたい。

お前の云ふ、片田舎に引込む事は、善い事と思はれる、何人も時節の來るのを待つより外に
道のない時があるものだ。

何よりも體を大事に、呉々も達者であるやうに、折角氣を附けて生活することを希望する。

二十四日

太郎

てる子殿

* * * * *

『それから』

物語は容易に盡きないが、紙数は早くも盡きてしまった。一と先づペンを擱くに當り、それから先の概略を大綱みにして、物語の伏線を埋けて置きたい。詳しくは他日再び稿を續け、重ねて讀者にお目見得する機會の、惠まれることを期待しつゝ――

桂公直筆の玉章を肌身につけて、都落ちの肚を極めたお鯉は、山の手も郊外に近い廣尾の奥に、人目を忍ぶ隠れ家を見つけたのは宜かつたが、垣一重隣りの住人が、社會主義者の木下尙江だつたとは――

年が改まつて間もなく、内閣を西園寺公に明け渡し、久しぶりで閑地に就いた桂公との四方山話に、何氣なくお鯉の名を持ち出し、だしぬけに廣尾の隠れ家を驚かして、忽ちお鯉を桂家

公認のお部屋様に祭り上げた策士は、ハテ何處の何人であつたやら？

二代目お鯉を連れて、初代お鯉の宅へ、わざ／＼御挨拶に見えた通人や、紫朝に新内を語らせて女魁ごつこに興がつた粹人が、揃ひも揃つて、いかめしい元老だつたなどゝは、嘘のやうだが事實である。

桂公が首相として時めいてゐた頃、關西の財界で羽ぶりのよかつた岩下清周氏が、公の舊友だつたことは蓋し知る人稀であらう。お鯉が大坂から公の御落胤を引取る交渉や、大坂の某富豪が男爵を頂いた顛末を語るにつけても、岩下氏の名を逸してならぬとは、抑も如何いふ仔細があるのであらう。

お前の病ひは氣の凝りだ、薬を服むより謠曲を稽古せよ――斯う言つてお鯉を金春流の櫻間左陣翁に弟子入させたのは、本所は緑町「醫は仁術」の老先生、御姓名のところは暫くお預

かり。

桂公還曆のお祝ひに、心を籠めて贈られた衝立から、刺繡の鯉が抜け出して、目白の大御所に時ならぬ波瀾を捲き起したとは、偕も面妖な話、初耳の人には受け取れないのが道理。

別荘の近所に別荘を建て、それで以て桂公に近づかうとした銀行家はあませんか。お鯉に泣きつき庭前に忍んで、公爵の袖に縫った砂糖屋さんはあませんか。公爵令嬢の縁談を聞きつけ、頼まれもしないのに媒酌人を買って出た船屋さんはあませんか。居るなら、皆さん、手をお挙げなさい。

御下賜金の事は申すも畏し。濟生會創立の砌、奉加帳の初筆に百萬圓と切り出して、天下の富豪にお手本を示したのは天晴鶴彦大人、今尙鏗鏘はお目出度い。

首相官邸の門は役者にも開かれてゐる、守田勘彌が出入したとて毛頭仔細はない。たゞ勘彌の母者人が、青年桂公初戀の對象で、夫婦約束までした仲と聞いたたら、「アラまあ」とだけでは済まされまい。

後藤、若槻兩氏を腰巾着——ではない智恵囊にして、シベリアから露國に踏み出した桂公は新橋驛頭涙に泣きぬれて、餘所ながら見送つた若い女を、自分の血を分けた子供とは氣のつく筈もないが、御落胤は東京にも在つたのである。

乃木將軍の殉死にからまる祕話——語る者は山縣、桂兩公、聽く者は無論お鯉。

内大臣から三度目の總理大臣、桂公としては餘儀なかつたであらうが、憲政擁護運動の火の手に、さしもの公も政治的大火傷をした。その上に令嗣與一氏の早世。ても恐ろしい先夫人の崇りと、夜更け人定つてから公が病床で語り出す一條の因縁話、臆病者は聞くべからず。

あゝ何度思ひ返しても諦められないのは、重病人の公爵に後ろ髪ひかれながら、義理の柵越え兼ねて、かな子夫人と入れ違ひに、鎌倉を引揚げた八月のあの日あの夜、山百合が白く匂つてゐた鎌倉山の星月夜。

血を分けた二人の愛し兒が、臨終の父公爵に別れを惜しむにさへ、山縣、井上兩元老の奔走が入用だつたとは――、天も照覽あれ、お日様が西から上ることはあつても、彼の女の曲げたお冠りの眞直になる日とはあるまい。彼の女とは？ 彼の女とは？

昭和二年七月九日印刷 (二—三〇〇)

お鯉物語
◇ 定價二圓五十錢 ◇

版 權 所 有



著 者	安 藤 照
發 行 者	東 京 市 京 橋 區 尾 張 町 二 丁 目 十 五 番 地 福 永 一 良
印 刷 者	東 京 市 京 橋 區 湯 山 町 五 番 地 渡 邊 吉 郎

版 元

東京・銀座・尾張町
福 永 書 店

電話 銀座 一六九九番
電話 銀座 一六九九番

◇ 目書行刊店書永福 ◇

德富健次郎著△小説	德富健次郎著△小説	德富健次郎著△小説	德富健次郎著△小説	德富健次郎著△小説	德富健次郎著△小説	德富健次郎著△小説	厨川白村著△最近英詩概論
富	富	士 第三卷	黒い眼と茶色の目	みみずのたはこ	春	崎 順 子	
送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢	送料 金二圓十錢
定價 金二圓十錢	定價 金二圓十錢	定價 金二圓十錢	定價 金二圓十錢	定價 金二圓十錢	定價 金二圓十錢	定價 金二圓十錢	定價 金三圓五十錢

◇ 目書行刊店書永福 ◇

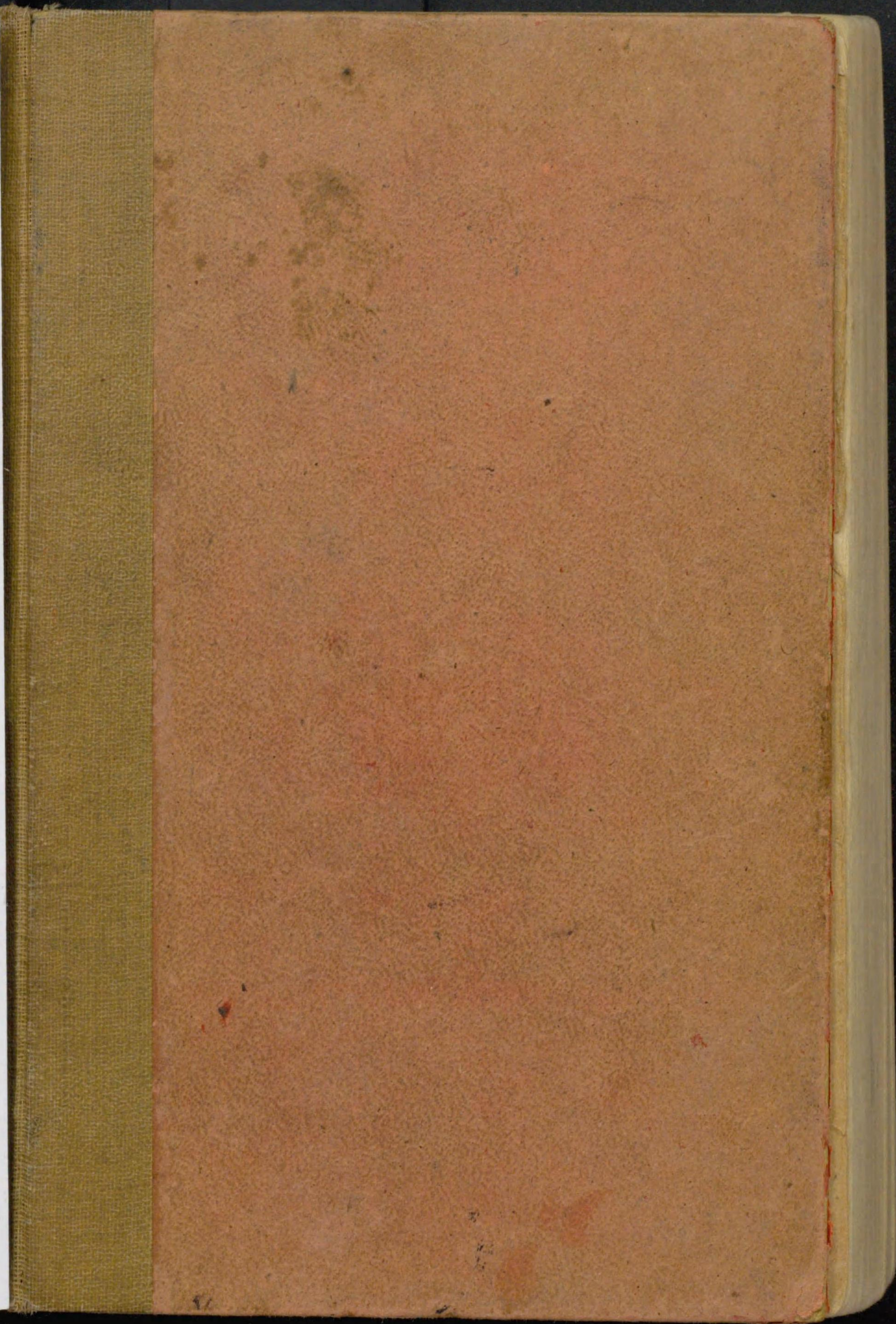
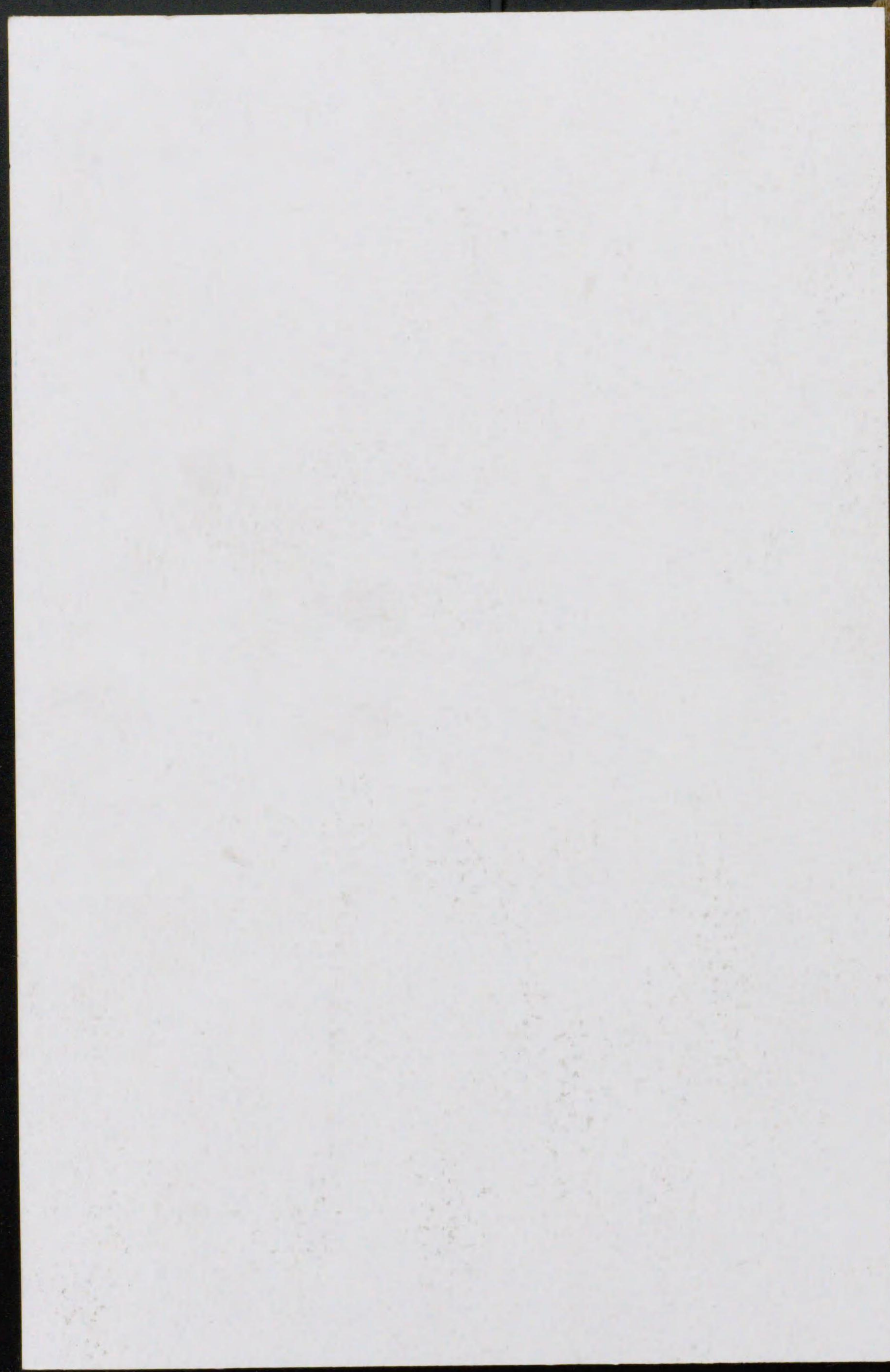
矢代幸雄著△西洋名彫刻古代篇	阪本 勝著△戯曲	井手訶六著△小説	横山正幸譯著△ア	岡本鶴松著△異國の華を尋ねて	杉浦翠子著△小説	喜多村 進著△小説	江尻正一著△抒情句	國枝俊文著△俊文脚本集 第一卷
洛 陽 餓 ゆ	十字路の乙女	ルルの女	異國の華を尋ねて	愛しき歌人の群	青磁色の春	魚の糞		
送料 金廿六圓	送料 金一圓六十錢	送料 金二圓五十錢	送料 金一圓六十錢	送料 金二圓九十錢	送料 金二圓三十錢	送料 金二圓三十錢	送料 金一圓八十錢	送料 金二圓五十錢
定價 金廿六圓	定價 金一圓六十錢	定價 金二圓五十錢	定價 金一圓六十錢	定價 金二圓九十錢	定價 金二圓三十錢	定價 金二圓三十錢	定價 金一圓八十錢	定價 金二圓五十錢

◇ 目 書 行 刊 店 書 永 福 ◇

厨川白村著△象牙の塔を出て	定價 金二圓八十錢 送料 金二十錢
厨川白村著△十字街頭を往く	定價 金二圓五十錢 送料 金二十二錢
賀川豊彦著△地殻を破つて	定價 金二圓八十錢 送料 金二十二錢
賀川豊彦著△詩集 永遠の乳房	定價 金二圓五十錢 送料 金二十二錢
賀川はる子著△女中奉公と女工生活	定價 金一圓六十錢 送料 金十六錢
沖野岩三郎著△小説 宿 命	定價 金二圓八十錢 送料 金二十二錢
沖野岩三郎著△宿命論者のこゝろば	定價 金一圓九十錢 送料 金二十錢
木下利玄著△歌文 李 青 集	定價 金二圓三十錢 送料 金二十錢

556

243

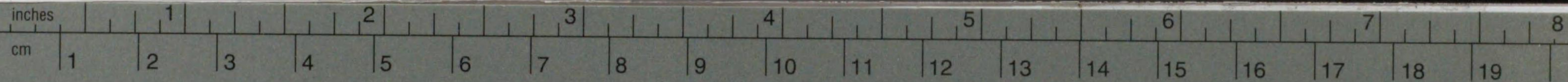


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

